

東海大学の新たな地域連携 **トコラボ**

To-Collabo プログラム

成果報告書 **2015**



To-Collaboプログラム

成果報告書 2015

—To-Collaboプログラム—

地域のご理解・ご協力に感謝申し上げます

本学が文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」の採択を受けて推進しておりますTo-Collaboプログラムは、2015年度末時点で中間年である3年目の活動を成し遂げました。

本学のUSR（University Social Responsibility；大学の社会的責任）は、本学固有の「知・人・力」を最大限に生かし、地域の課題やニーズを把握し、それらを解決するための連携活動の継続的な実施と、社会で必要とされる能力を培った学生を輩出し続けることだと考えております。

このようなUSRの視点から、本学のTo-Collaboプログラムは、全国にキャンパスを有する総合大学の強みを生かした「全国運動型地域連携活動」を柱に、地域特有の課題や全国共通の課題を基に下記の4計画8事業を設定しました。



この4計画8事業を本学の教職員・学生が共有、協力して解決策を見出すとともに、パブリック・アチーブメント型教育を導入し、地域連携活動を通じた社会的実践力を有する人材の育成に取り組んでまいりました。

今年度はこれまでの2年間に引き続き、教育改革では全学必修3科目を含めたパブリック・アチーブメント型教育導入に向けた新センターの立上げ準備やそこでの授業内容の検討のほか、多様なステークホルダーの方々との対話機会を設け、地域の課題を解決する人材の育成を目指したFD/SD研修を実施いたしました。また、研究・社会貢献活動においても、教職員・学生による様々な活動が展開され、防災マップを作る、観光資源を発掘する、地域の子どもたちを対象としたエコや自然環境、科学に関する教室の開催など、様々な形で地域の活動に参画することができました。

このような私たちの地域における活動の展開は、ひとえに行政や住民の皆さまのご理解とご協力があって為し得ることです。次年度は本事業を確実なものとするため、大学の地域連携活動のさらなる充実を図るための支援体制を整えんとともに、教育改革を進め、地域との連携を深化させ、本学が地（知）の拠点として社会への責任をより一層果たす所存です。それぞれの地域の皆さま、関係者の皆さまにも変わらぬご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

東海大学 学長

Contents

1.運営体制	
1) 運営組織	8
2) 広報	9
3) 情報収集	10
4) 点検・評価	11
2.地域との連携の促進	
1) 自治体との連携	14
2) 「地域志向教育研究経費」による教育・研究・社会貢献活動の推進	18
3) 大学推進プロジェクトの設置	41
4) To-Collaboプログラム地域志向教育研究報告会の開催	47
5) To-Collaboプログラムシンポジウムの開催	48
6) To-Collabo市民セミナーの開催	49
7) 学生による社会貢献活動	50
8) 地域連携講座の開催	55
3.教養教育の改革に向けた取り組み	
1) FD・SD研修会の開催	64
2) PA型教育の実践	69
3) PA型教育の達成度を評価する方法の考案・試行	71
4) PA型教育を担う新組織の設立	72

1. 運営体制

1) 運営組織	8
2) 広報	9
3) 情報収集	10
4) 点検・評価	11

1. 運営体制

1) 運営組織

①To-Collabo 推進室

To-Collabo 推進室は、室長、次長、付教員 2 名、専任職員 3 名、地域コーディネーター 1 名、特任職員 1 名、派遣職員 1 名及び小田急線「東海大学前」駅前の「東海大学サテライトオフィス 地域交流センター」に勤務する 3 名が所属している。

また、全国に広がる連携自治体との協力関係をより密にすべく、各校舎に「COC 担当窓口」を設置し、清水校舎、熊本・阿蘇校舎、札幌校舎には地域コーディネーターを設け、活動を推進した。

②To-Collabo プログラム運営委員会

湘南校舎に「To-Collabo プログラム運営委員会」を設置、原則月 1 回のペースで、年間合計 12 回開催して、本プログラム全体の年間計画やそれぞれの事業についての審議・承認を行った。また、湘南校舎を除く各校舎における本プログラムの推進を司る機関として、各校舎にも To-Collabo プログラム運営委員会を設置し、各校舎の To-Collabo プログラム運営委員会が主体となって計画したもので、各校舎とその所在地の自治体と連携した取組みである地域志向教育研究経費タイプ 3 に関わる審議・承認・報告等を行った。

③各校舎 To-Collabo プログラム事務担当者連絡会／To-Collabo プログラム推進検討会

プログラムの推進に向けた支援体制を強化するため、2015 年 6 月 17 日（水）に全校舎を TV 会議でつないでの「各校舎 To-Collabo プログラム事務担当者連絡会」を開催し、情報共有を促進した。

また、プログラムの推進に向けた支援体制を強化するとともに、本学の地域連携をどのように推進していくか検討を行い、更なる校舎間連携の強化を図り、全学が一丸となって取り組んでいくという趣旨のもと、2016 年 1 月 22 日（金）に湘南校舎において「To-Collabo プログラム推進検討会」を初めて開催した。当日は各校舎から、To-Collabo プログラムを担当する職員 21 名が参加した。

推進検討会では、木村英樹 To-Collabo 推進室長から本プログラムの現状及び今後の展開について説明を行い、続いて今年度から湘南校舎にて地域コーディネーターを務める鍵和田政美氏が、行政機関での長い経験をもとに、地域連携や本プログラムについて行政の視点と大学に勤めてからの視点で講演を行った。さらに、各校舎における本プログラムの取組みについて発表が行われ、それぞれの校舎における運営体制や学生との係りについて、活動の進捗状況やその中から見えてきた今後の課題について報告がなされた。学生が主体的に取り組んでいる活動も多岐に亘り、学生が積極的に参加している様子や“何のために”このプログラムを推進しているのかという共通認識を教職員全員が持つことの重要性を再度確認することができた。

後半は、発表の内容をもとに、今後の To-Collabo プログラムをどのように展開・継続していくかを検討する全員参加のワークショップを実施した。A、B、C の 3 つのグループに分かれて活発な議論が交わされ、各グループから「学生の視点・



教職員の視点」「顔の見えるつながり」「学生のコミュニケーション能力」といったキーワードが出され、最後にグループの代表者が発表を行った。その中で、学生とともに教職員ももっと地域に出て行くことで新たな発想を得ることで、その発想をもとにまた新たな活動が生まれ、学生の社会的実践力を養う場の形成、教育的機会の更なる創出につながるという道筋が垣間見えた。また、学生や市民を巻き込みながら運営していく一体性を確保するために、まず教職員自身の意識改革も必要だということを改めて確認することができた。

2) 広報

学内外に広く To-Collabo プログラムで行っている取組みを周知することを目的に、ニュースレター「To-Collabo 通信」を発信してきたが、今年度よりデザインを一新し、昨年に引き続き 4 回(Vol.8～Vol.10、PA 型教育特集号)発行した。その他、学内向け周知のため号外を 1 回発行した。

また、Web サイト、Facebook での活動紹介を昨年に引き続き行った。Web サイトについては、地域連携活動の事例データベースである To-Collabo ケースの第 2 期構築に伴い、レイアウトを一部改修した他、東海大学サテライトオフィス地域交流センターのページを To-Collabo の Web サイトに組み込む形で新たに開設した。



[参考:To-Collabo 通信 Vol. 8、Vol. 9、Vol. 10、PA 型教育特集号]
(号外は本誌編集時作成中のため掲載無し)

Web サイト URL : <https://coc.u-tokai.ac.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/tokai.coc>

3) 情報収集

本学のCOC事業における地域貢献活動、教育改革の参考にするため、国内他大学における地域連携の取組みを視察した。視察者は、To-Collabo推進室課員のみならず、To-Collaboプログラム運営委員会委員や本学各部署の教職員である。以下は視察の概要である。

【視察先1：2015年7月17日（金）筑波学院大学】

概要：平成17年度より学生の社会力育成のために「つくば市をキャンパスにした社会力育成教育」と題して地域連携による教育を推進しており、実際の担当教員等から取組説明を受けて意見交換等を行った他、地域の子どもの見守り活動などの実際の活動の視察、学生との意見交換も行った。

【視察先2：2015年12月18日（金）名古屋学院大学】

概要：本学と同様に平成25年度大学COC事業に採択された名古屋学院大学の学生による地域活性化活動の1つであるマイルカフェの視察の他、地域志向科目等のカリキュラム編成に関する事項やさまざまな事業に関する情報交換を行った。

【視察先3：2015年12月19日（土）龍谷大学】

概要：「龍谷大学社会連携・社会貢献活動報告会2015」での情報収集活動

- ・記念講演（株式会社CAP代表取締役社長 樫野孝人氏）
- ・事例紹介（学生と教職員が地域の課題解決に取り組んだ事例紹介）
- ・ポスターセッション

【視察先4：2016年1月29日（金）静岡県立大学】

概要：「大学・地域共創シンポジウム」での情報収集活動

- ・基調講演（異文化コミュニケーター、旧国連ハビタット親善大使 マリ・クリスティーン氏）
- ・パネルディスカッション（テーマ：地域の健康を『幸福度』で計る）

【視察先5：2016年2月27日（土）～28日（日）高知大学】

概要：平成27年度COC/COC+全国シンポジウム「大学改革と機能別分化～地域における大学の存在意義の高まりと将来のあり方」での情報収集活動

- ・基調講演（明治大学農学部教授 小田切徳美氏）
- ・パネルディスカッション（まち／ひと／しごと分科会）
- ・事例報告

【視察先6：2016年2月29日（月）高知工科大学】

概要：高知工科大学が取り組んでいる地域貢献活動の取組みの視察及び担当教職員との意見交換を行った。



高知工科大学 香美キャンパス

4) 点検・評価

①地域志向教育研究経費の採択審査（2015年5月実施）

To-Collabo プログラム運営委員会の下に設置された採択審査委員会にて提出された応募書類の内容に対して評価を行った。評価は各委員が(1) どのような課題に取り組み、現在の状況をどのようにして解決・改善していくかが明確かつ具体的に記載されているか、(2) 取組みの内容が「地域の活性化、地域への貢献を目的とし、地域を志向した教育の推進につながる活動」という To-Collabo プログラムの趣旨を理解した上で考案されているか、といった視点から評価点とコメントの付与を行い、採択審査委員会において各取組課題に優先順位を付けた上で、学内外の委員で構成される To-Collabo プログラム評価委員会へ上程した。

To-Collabo プログラム評価委員会では、採択審査委員会による評価結果に基づき、地域、4計画8事業、金額等のバランスを勘案した上で、取組みの採択案を作成して To-Collabo プログラム運営委員会へ上程し、同委員会における審議を経て、採択される取組課題と配算額が承認された。

②地域志向教育研究経費に採択された取組み及び大学推進プロジェクトの成果に対する評価 (2016年3月実施)

To-Collabo プログラム運営委員会の下に設置された採択審査委員会から選抜した成果評価メンバーが地域志向教育研究経費に採択された取組課題及び大学推進プロジェクトの代表者から提出された「成果報告及び自己評価」を、(1) 計画通りに進んだか、(2) どれだけの成果が得られたか、という視点から評価点とコメントの付与を行い、その評価結果について To-Collabo プログラム評価委員会が、(1) その評価結果・評価方法の妥当性についてのコメント、(2) 次年度の募集・採択された取組みの実施に向けたコメントの付与を行った。

(To-Collabo プログラム評価委員会から付与された主なコメント)

- ・取組件数は、全体としては昨年度と同程度の活動実績であり全体的に良好である。
- ・今年度より、地域志向教育研究経費と、4計画8事業の中で大学が推進していくべき事業の2種類に分け、採択・実施していることは、本計画を推進する上で新たな展開を見せている。
- ・安心安全に関する取組みや地域産業による経済の活性化などブランド創造の取組み、更には地域観光の取組みなどの地域にマッチした取組みは、高い評価を得ておりとても良い。

③To-Collabo プログラムの進捗状況に対する評価（2016年3月実施）

To-Collabo プログラム評価委員会が、To-Collabo プログラムの「進捗状況報告」の内容に対して、(1) 本プログラムを効果的・効率的に推進するための運営体制が構築されたか、(2) 地域との連携は着実に促進されているか、(3) 教養教育の改革へ向けた取組みは着実に進んでいるか、という視点からコメントの付与を行った。

(To-Collabo プログラム評価委員会から付与された主なコメント)

- ・地域志向教育研究経費に採択された各取組課題の活動は、全体的に適切に実施されていたと思われるが、一部には参加者が教員のみ等、学生教育につながっていないと思われる取組みもあった。
- ・本プログラムで重要なことは、地方自治体と大学教育の両方の目的・目標が達成されることである。大学のマンパワーに頼るのではなく、地域の発展にどのように貢献しているのか、さらには学生へのPA型教育の広がりにも寄与しているのかどうか重要である。

また、大学評価委員会が、To-Collabo プログラム評価委員会による評価結果をもとに、To-Collabo プログラムの進捗状況に対する評価を行った。

(大学評価委員会から付与された主なコメント)

- To-Collabo プログラムの運営組織、広報活動、情報収集、地域との連携促進、教養教育の改革に向けた取り組みなど、活動は全体的に広がりを見せており適切に実施されていることは評価できる。
- To-Collabo プログラムについて、大学内での認知度は広がりを見せているが、未だに教職員の間に温度差があるので検証が必要であろう。
- 地域志向教育研究経費では、実施した内容が具体的に地域の発展や学生の教育に寄与しているのかどうか検証する必要がある。そのためには、評価事項の中に、取り組みで得られた成果はもちろんであるが、それ以外の成果（例えば、地域の人を巻き込んでいるか、学生の教育に寄与しているか等）も評価項目とした方がいいのではないかと。
- PA 型教育の定着を図るため、大学の組織改編を行ったことは評価できる。今後は、それに伴うカリキュラム改訂や事業終了後の地域活動の定着化など、計画的に着実に実施されることが望まれる。

2.地域との連携の促進

1)自治体との連携	14
2)「地域志向教育研究経費」による教育・研究・社会貢献活動の推進	18
3) 大学推進プロジェクトの設置	41
4) To-Collaboプログラム地域志向教育研究報告会の開催	47
5) To-Collaboプログラムシンポジウムの開催	48
6) To-Collabo市民セミナーの開催	49
7) 学生による社会貢献活動	50
8) 地域連携講座の開催	55

2. 地域との連携の促進

1) 自治体との連携

本事業における連携自治体は札幌市南区、港区、伊勢原市、平塚市、秦野市、大磯町、静岡市、熊本市、阿蘇郡南阿蘇村の9自治体である。

今年度も各連携自治体との協議会等を通じて連携をより一層深めていくとともに、To-Collabo プログラムについての課題をいただいた。

以下は、各校舎所在地の自治体や地域との連携状況である。

【札幌市南区】

札幌校舎が所在する札幌市南区とは、札幌市南区市民部地域振興課を通じて連携事業を展開する他、地域では「札幌市南区の会」を不定期に年に3、4回実施し、毎回地域講師を招いて、地域連携に関連するプレゼンテーションや交流会等を行っている。参加者は、南区内の商店街、企業、学校、町内会、アート作家、行政などの関係者、及び本学・付属高校はもとより、他大学・高校の教職員であり、この会を通して交流を深め、新たな連携事業の発掘を行っている。

この会から連携事業（本学学生が南区内の商店街で運営する「Three Café」、グローバルアイコン導入の「地域商店街マップ」、連携授業（本学の「プロダクトデザイン B」、札幌市立高校の「商品開発」）などが生まれ、更に発展している。



【港区】

高輪校舎が所在する港区とは、包括協定の締結後、さらに港区高輪地区総合支所と「高輪地区大学連携推進会議」（年2回開催）や「高輪地区内大学（明治学院大学・北里大学・東海大学）連携会議」（年2回開催）を通じて協働・連携体制を構築している。また、チャレンジセンターの「Takanawa 共育プロジェクト」による大学と地域との融和として、大学・学生が近隣町会を招待し、150名を超える参加者による神輿渡御を行い（11/3開催）、シルバー人材センターと協力しシニア層を中心とした港区交流活動ネットワーク交流会を実施している（9月より毎月第3水曜日開催）。

特に今年度は、近隣3商店会16町会の協力を得て「高輪まつり2015（防災・減災を考える交流会）」と題して高輪校舎主催で初めて開催した（11/22開催）。このイベントは、大学推進プロジェクト「地域デザイン計画安心安全事業」（防災減災）、地域志向教育研究経費「科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト」が協力し、チャレンジセンター「サイエンスコミュニケーター」による「子ども向けサイエンスショー」、情報理工学部内田准教授による「災害時のインターネット活用について」の講演が行われた。また、港区国際交流協会、高輪消防署二本榎出張所など各近隣施設からのブース展示、本学医学部付属東京病院の多くの看護師ならびに港区高輪地区高齢者相談センターによる出張健康診断も実施され、当日は近隣自治会で構成されている防災ネットワークの会員や学生、卒業生、地域住民など約500名が多彩なイベントを楽しんだ。



【伊勢原市】

伊勢原校舎の所在地であり、湘南校舎の近隣自治体である伊勢原市とは、「伊勢原市・東海大学提携事業運営協議会」やそれに伴う打合せ等を年数回開催し、連携を深めている。また、学部が展開する自治体インターンシップの受け入れ等もしていただいた。

なお、主な連携実績は以下の通りである。

- ・2015年度東海大学市民健康スポーツ大学（提携事業）
- ・伊勢原市総合戦略推進会議（政治経済学部経済学科教授と学生が委員を務める）
- ・武道（柔道）・ダンス講習会（中学校教員対象）
- ・丹沢湘南観光連携会議
（伊勢原市観光協会と観光学部が連携）
- ・平成大山講プロジェクト
（外国語教育センターが「おおやまおもてなし塾（主催：伊勢原市）」に協力等）
- ・健康バス測定会
（地域志向教育研究経費採択課題において、伊勢原市健康管理課とともに実施）



【平塚市】

湘南校舎が所在する平塚市とは、「平塚市・東海大学交流事業推進協議会」等の協議会やそれに伴う打合せ等を年数回開催しており、従来以上に連携を深めている。また、学部が展開する自治体インターンシップの受け入れや東海大学サテライトオフィス地域交流センターにおいてマイナンバー制度に関する平塚市民対象の講座も実施いただいた。さらに、今年度は「平塚市と東海大学との交流事業に関する申し合わせ」締結30周年を記念して、「平塚市長と本学学長の対談」など9つの記念事業を計画・実施し、ロゴマークも本学学生がデザインした。

なお、主な連携実績は以下の通りである。

- ・子ども大学ひらつか奏アカデミー
- ・武道（柔道）・ダンス講習会（中学校教員対象）
- ・丹沢湘南観光連携会議
（平塚市及び平塚市観光協会と観光学部が連携）
- ・平塚市帰宅困難者対策訓練
（訓練において、大学推進プロジェクト「地域デザイン計画安心安全事業」で開発したTwitterを用いた災害情報共有システムを使用）



<30周年記念事業>

- ・平塚市長と本学学長の対談
- ・海洋学部博物館ツアー
- ・湘南ひらつか七夕まつりでの演技（チアリーディング部）
- ・芸術体験教室（TOKAI おひろめ芸術祭と協働）
- ・スポーツ体験教室
- ・建学祭で市名産品を販売



教養学部芸術学科デザイン学課程
の学生がデザイン

- ・平塚市美術館での展示会
- ・障がい者理解のロゴマーク作成
- ・30周年記念映像（文学部広報メディア学科等の学生が作成）

【秦野市】

湘南校舎が所在する秦野市とは、「秦野市・東海大学連携事業運営協議会」やそれに伴う打合せ等を年数回開催しており、連携を深めている。また、学部が展開する自治体インターンシップの受け入れや地域の課題を学生自身が考えるグループワーク型の授業への市職員の派遣、東海大学サテライトオフィス地域交流センターにおいてマイナンバー制度に関する秦野市民対象の講座も実施いただいた。

なお、主な連携実績は以下の通りである。

- ・秦野市防災フォーラム 2015「市民で考える防災・減災 ～みんなで守ろう。この街を。～」
（大学推進プロジェクト「地域デザイン計画安心安全事業」が秦野市、大根地区自治会連合会とともに開催）
- ・武道（柔道）・ダンス講習会（中学校教員対象）
- ・丹沢湘南観光連携会議
（秦野市観光協会と観光学部が連携）
- ・「ひまわりの里」ひまわり壁画プロジェクト
ひまわりスタンプ・ワークショップ
（教養学部芸術学科デザイン学課程学生のプロジェクト。後援：秦野市）



【大磯町】

湘南校舎の近隣自治体である大磯町とは、「大磯町・東海大学提携事業運営協議会」やそれに伴う打合せ等を年数回開催しており、連携を深めている。また、学部が展開する自治体インターンシップの受け入れ等もしていただいた。

なお、主な連携実績は以下の通りである。

- ・丹沢湘南観光連携会議（大磯町と観光学部が連携）
- ・武道（柔道）・ダンス講習会（中学校教員対象）
- ・大磯 de アフタヌーン
（観光学部の学生が企画し、大磯町、大磯町観光協会及び大手旅行代理店等とジョイントして実施）



【静岡市】

清水校舎が所在する静岡市とは、締結している包括協定に基づき、本学と静岡市企画局企画課との間で『静岡市と東海大学との包括連携推進協議会』を設置し、平成27年10月6日に第1回目の協議会を開催した。それに伴い包括連携事業についての事務局による打合せを数回開催しており、今後の事業計画や、包括連携協議会の取り決めや、意見交換等を行った。

また、今年度の静岡市との主な連携事業実績は以下の通りである。

- ・海の日記念事業（海洋科学博物館・自然史博物館ガイドツアー）

- ・環境講座（海浜植物観察会）
- ・環境講座（プランクトン観察会）
- ・サイエンスワールド（夏休み子ども科学教室）
- ・アオウミガメ保護事業（種の保全対策事業）
- ・環境講座（シロウオ観察会）
- ・東海大学「望星丸」洋上セミナー
- ・静岡市長と本学学長の対談

（To-Collabo プログラム地域志向教育研究報告会にて実施）



【熊本市】

熊本校舎が所在する熊本市とは、主に、地域志向教育研究経費（タイプ 3）で取り扱っている「医工連携分野」を中心に、セミナーの共催や今後の連携事業のあり方についての意見交換等、活発な交流を行っている。また、本学が主催している「世界一行きたい科学広場 in 熊本」や「東海大学チャレンジカップマイコンカーラリー熊本大会」等のイベントについては、熊本市教育委員会の後援のもと実施している。さらに、熊本校舎周辺の熊本市東区西原校区においては、自治会の方々と熊本校舎の学生会や教職員との交流を深めることを目的とした懇親会の開催や、チャレンジプロジェクトによる地域の魅力発見イベント等の連携活動を行っている。



【阿蘇郡南阿蘇村】

阿蘇校舎が所在する南阿蘇村とは、既に締結している交流協定に基づき、さまざまな連携活動を行っている。例えば、阿蘇校舎周辺に居住している学生の生活環境整備や文化の向上等を目的とした「黒川学生村連絡協議会」において、地域の方々と協働で、美化作業や防火・防災活動等を実施。さらに、南阿蘇村にて開催される南阿蘇村交流フェスタ「あそのみなみのあきまつり」において、大学のブースを出展した。また、南阿蘇村主催の創業セミナーにおいても、本学の教員を講師として派遣する等、さらなる連携強化に努めた。



2) 「地域志向教育研究経費」による教育・研究・社会貢献活動の推進

公募要領に記載された採択予定件数は、タイプ 1 (2 人以上のメンバーで行う取組み) については 8 件程度、タイプ 2 (5 人以上のメンバー且つ所属組織 (学部等) と地域 (自治体) を横断している取組み) については 2 件程度、タイプ 3 (各校舎の To-Collabo プログラム運営委員会が主体となって計画したもので、各校舎とその所在地の自治体と連携した取組み) については 7 件程度であったが、2015 年 4 月 8 日 (水) ~4 月 24 日 (金) の応募期間中に、本学の全校舎にわたる 18 学部・センターに所属する教員から 26 件の応募 (タイプ 1=16 件、タイプ 2=2 件、タイプ 3=8 件) があり、審査の結果、19 件 (タイプ 1=10 件、タイプ 2=2 件、タイプ 3=7 件) が採択された。

[参考：2015 年度「To-Collabo プログラム」地域連携推進のための活動助成公募要領]

<p style="text-align: right;">2015 年 4 月 8 日 学長 山田 清志</p> <p>2015 (平成 27) 年度「To-Collabo プログラム」 地域連携推進のための活動助成公募要領</p> <p>平成 27 年度「地 (知) の拠点整備事業」の一環として、地域の活性化、地域への貢献を目的とし、本事業の主旨である <u>地域を志向した教育の推進につながる活動であることをよく理解した取組み</u>を広く学内公募し、下記に基づき『地域志向教育研究経費』として活動費を助成致します。</p> <p style="text-align: center;">記</p> <p>○テーマ</p> <p>以下の 4 つのテーマに基づいた 4 計画 8 事業の内容に沿った活動であること</p> <p>I 地域の生活を充実させる 【地域デザイン計画】 1. 安心安全事業 2. グラッド 創造事業</p> <p>II 多世代の交流を促進する 【ライフステージ・プロデュース計画】 1. 大学開放事業 2. ぶらっ健康事業</p> <p>III 地域の魅力を発信する 【観光イノベーション計画】 1. 地域観光事業 2. 文化・芸術事業</p> <p>IV 自然環境を守る 【エコ・コンシャス計画】 1. エコ・ヘルパ事業 2. 動植物保護事業</p> <p>○単位 タイプ 1: 2 人以上のメンバーで行う取組み タイプ 2: 5 人以上のメンバー且つ所属組織 (学部等) と地域 (自治体) を横断している取組み タイプ 3: 各校舎の To-Collabo プログラム運営委員会が主体となって計画したもので、各校舎とその所在地の自治体と連携した取組み</p> <p>○受給資格 地域志向の教育・研究を目指す本学専任教員で、同一の活動計画において他から類似の助成金や共同研究費・受託研究費・補助金等を受けていない者</p> <p>○支給金額及び採択予定件数 タイプ 1: 1 件あたり上限 50 万円とし、8 件程度採択予定 タイプ 2: 1 件あたり上限 300 万円とし、2 件程度採択予定 タイプ 3: 1 件あたり上限 150 万円とし、7 件程度採択予定 ※タイプ 1・2・3 を併せた地域志向教育研究経費総額は 2,050 万円程度とする</p>	<p>○受給条件 ・活動期間: 採択日より 2016 (平成 28) 年 3 月 31 日 (木)</p> <p>・成果報告: ①2015 (平成 27) 年度内に開催予定の報告会 (12 月頃開催予定) で中間点の成果を発表し、年度末までに課題単位で報告会の開催や報告書作成により最終成果を報告すること ②2016 (平成 28) 年 2 月下旬までに成果報告書を提出すること</p> <p>・助成金の執行: ①大学改革推進等補助金取扱要領及び学内規程に則って執行すること ②課題代表者が取組み共同者の執行状況の把握につとめること</p> <p>○応募方法 「To-Collabo プログラム地域志向教育研究経費申請書」と「To-Collabo プログラム地域志向教育研究経費調査書」に必要事項を記入し、To-Collabo 推進室宛に提出すること (電子データを E-mail にて提出後、押印済みの本書を学内便または郵便等で送付すること)。 《送付先》 〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1 東海大学 To-Collabo 推進室 宛</p> <p>○応募期間 2015 (平成 27) 年 4 月 8 日 (水) ~ 4 月 24 日 (金)</p> <p>○審査 「To-Collabo プログラム評価委員会」において選考審査し、「To-Collabo プログラム運営委員会」で承認された後、5 月中旬に発表予定</p> <p>○採択説明会 採択後、採択者向け説明会 (5 月 19 日 (火) 予定) を開催するので、出席していただきます。</p> <p>○その他 不正使用等が発見された場合は直ちに助成をとりやめる</p> <p style="text-align: right;">以 上</p> <p style="text-align: right;">担 当 : To-Collabo 推進室 (近藤・永禮・岩城) E-mail : coc@tsc.u-tokai.ac.jp 内 線 : 720-2021~2023</p>
--	---

[参考：2015 年度地域志向教育研究経費採択課題一覧]

関連事業	分野	タイプ	代表者氏名	代表者所属	取組課題名	
地域デザイン	安心安全	社会貢献	1	芳川 玲子	文学部心理・社会学科	連動・連携型大学生メンタルサポーター活動の展開 ～連動・連携型地域貢献活動が地域学校及び大学生に与える効果～
		社会貢献	2	石井 直明	医学部基礎医学系	「市民に対する健康意識啓発」プロジェクト
	ブランド創造	教育	1	岡田 夕佳	海洋フロンティア教育センター	サクラエビ市場構造の現状と課題 ～サクラエビ産業と地域経済の活性化～
		社会貢献	1	山田 吉彦	海洋学部海洋文学科	地域産業の連携による市民参加型地域振興策の提言
		社会貢献	3	岩橋 正國	基盤工学部医療福祉工学科	熊本における医工連携事業の推進・拡大と地場産業の活性化
		社会貢献	3	松田 靖	農学部応用植物科学科	阿蘇地域におけるヤーコンを用いたブランド産地の創造
ライフステージ・プロフェュース	大学開放	教育	1	長 幸平	情報教育センター、情報理工学部	U・Iターン就職促進のための遠隔インターンシッププログラムの開発
		教育	1	阿部 幸一郎	医学部基礎医学系分子生命科学	生命科学実習と研究室開放・サイエンスカフェによる多世代間交流促進
		教育	2	岡田 工	チャレンジセンター	科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト
		教育	3	福崎 稔	高輪教養教育センター	世代を超えた知の共有と育成を目指した地域連動型教育プログラムの構築
		社会貢献	3	千賀 康弘	海洋学部海洋地球科学科	地域連携を通じた包括的環境アウェアネス・プログラムの構築
		社会貢献	3	植田 俊	国際化学部地域創造学科	地域－大学の連携を通じた知の「生活化」／生活の「知識化」プロジェクト
	スポーツ健康	社会貢献	3	沓澤 智子	健康科学部看護学科	「東海大学市民健康スポーツ大学」を中心とした市民の健康づくりの支援活動 (市民会員の身体活動量と心身の健康度の関連性の分析及び学生と市民との世代間交流活動)
観光イノベーション	地域観光	社会貢献	1	高雄 元晴	情報理工学部情報科学科	留学生と日本人学生との協働による地元貢献活動の国際化の試み
		社会貢献	1	藤野 裕弘	教養学部人間環境学系自然環境課程	世代間共生にむけた環境NPOとの連携による環境教育の実践と検討
		教育	1	東 恵子	海洋学部環境社会学科	パブリック・アチーブメント教育を通じた地域連動による人づくり
		社会貢献	3	田中 伸彦	観光学部観光学科	交通インフラの変革に対応した地域観光資源の活用
エコ・コンシャス	動植物保護	研究	1	谷 晋	総合教育センター	神奈川県絶滅危惧種シウリザクラの衰退調査と保全対策の検討
		研究	1	竹中 万紀子	生物学部生物学科	コムドリの生態と渡りを解明し保全を考える - 地域と大学の協働活動として -

以下、19 件の課題の 2015 年度成果報告である。

1) 連動・連携型大学生メンタルサポーター活動の展開

～連動・連携型地域貢献活動が地域学校及び大学生に与える効果～

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：芳川玲子（文学部心理・社会学科）

共同取組者：宮森孝史、菅沼真樹、山田幸恵、小川恒夫、浅井千秋、飯島祐介（文学部心理・社会学科）

取組の概要

{目的}:心理学及び社会学の素養のある大学生及び大学院生有志を大学生メンタルサポーターとして養成し、①地域貢献：地域学校へ出向き、学校のニーズに合わせた貢献活動を行うこと。②人材育成：メンタル面における対人援助力、社会人基礎力を身につけること。具体的には：

①地域貢献：学校行事への参加及び学校問題解決・改善への手伝い

②人材の育成：大学生の対人援助力（対人コミュニケーション力、問題発見力、問題解決力）及び社会人基礎力（前に踏み出す力（アクション）、考え抜く力（シンキング）、チームで働く力（チームワーク））の育成。

なお、大学生メンタルサポーターの役割の役割は以下のようにした。

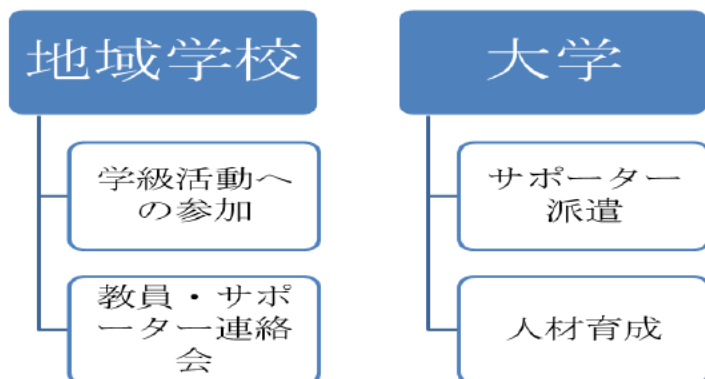
a, 学校安心・安全に関する予防的活動

b, 緊急対応後の児童生徒の安心・安全感の回復

c, 問題の再発防止

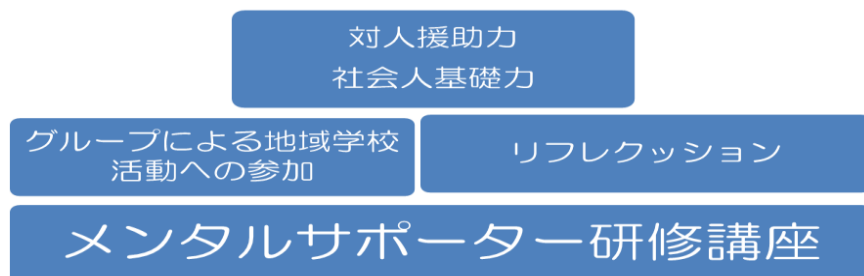
d, 緊急時、専門家の指示のもと、補助的な役割を果たせる存在

{手法}: 地域貢献デザイン



中学生の感想をグループワーク後に尋ねる。

サービスラーニングモデルによる大学生メンタルサポーター人材育成



メンタルサポーターには、11月及び2月にアンケート調査を実施する。

{経過}: 6月 メンタルサポーター募集、7月～9月 養成講座実施、9月上旬 中学校から課題の依頼・サポートグループ分け、9月中旬 サポーターが中学校へ運動会・合唱祭・授業参観に参加・手伝い、11月 学級分析・学級観察開始、12月 秦野市・大磯町の中学校との連絡会議の実施、学級に実施するワークを考案、作成、2月 ワークの実施、2月27日 中学校を招いての成果発表会の実施。

取組の成果

目的別ごとの成果として:

- ①二つの中学校に出向き、教員とともに、各学級の様子を検討しながら、中学校1年生から3年生を対象に学校のニーズに沿ったグループワークを行った。中学生からは、
 - ・自分の良いところがわかったし、友だちのことも考えられたので楽しかったです。
 - ・この授業をやって実は色々なこと、色々な人に毎日感謝していることがわかって良かった。
 - ・「ありがとう」を言葉で聞くと思ったより嬉しかった。感謝の気持ちを伝えることは大切だと思った。等の感想を頂くことができた。
- ②人材育成においては、対人援助力及び社会人基礎力両方とも有意に差があった。特に、大根中学校グループでは、読解力と考え抜く力、大磯中学校グループでは、自己主張、考え抜く力が活動前と活動後とでは大きな変化が見られた。大学生は活動を通して、手ごたえを感じられたことがいえる。

2) 「市民に対する健康意識啓発」プロジェクト

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：石井直明（医学部医学科基礎医学系）

共同取組者：三田信孝（体育学部生涯スポーツ学科）、柴田健雄、笠口隆重（医学部医学科基礎医学系）、池内眞弓（健康科学部看護学科）、佐多憲二（医学部ライフケアセンター）

取組の概要

本プロジェクトは、神奈川県と東海大学との包括連携協定として取り組む事業分野【「未病を治す神奈川宣言」未病センターの設置】の一環として伊勢原市保健福祉部健康管理課と共同して取り組むものである。

伊勢原市の国民健康保険者の健康診査の平成 25 年度の受診率は、35%~40%で、平成 20~25 年度でもほとんど改善はなく、昨今の医療費増大の折、憂いる状況にあり、健康診査の受診率の改善を図ることは、非常に重要な課題となっている。

未受診者 60%~65%の受診に対する意識は、「全く受診する気のない人」と「受診する気はあるものの何となく受診できていない人」と半々の状況にあり、本プロジェクトでは、この「受診できていない人」を中心に働きかけ、市民に対する健康意識の啓発教育を行う。



取組の成果

本プロジェクトは、「市民に対する健康意識啓発」教育を通して、市民の健康意識の向上を図ることにより、直接的には、健康診査の受診率のアップが取り組み成果として期待できると考えた。この健康診査の受診は、疾患発症に対する予防対策となる。また、健康意識の向上は、日々の生活習慣の改善にもつながり、結果として市民の健康寿命の延伸につながることを期待される。

これらの取り組み成果は、伊勢原市をはじめ、秦野市、平塚市、厚木市、大和市、大磯町へと広く神奈川県西地域への展開が期待できると考えている。

更に To-Collabo と連携することで、さまざまな学部の学生が地域健康教育への関心を高めることがで

きると考える。また、東海大学にとっても、ここで得られる健康データの解析研究のみならず、健診受診者の健康データを含めたデータベース構築・解析研究へと推し進めることで、広域の地域貢献につながり、東海大学のブランド価値を大きく高めるものとなり、引いては東海大学への入学の増加などにつながって行くものとする。

3) サクラエビ市場構造の現状と課題 —サクラエビ産業と地域経済の活性化—

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：岡田夕佳（海洋学部海洋フロンティア教育センター）

共同取組者：関いずみ（海洋学部海洋文明学科）、山崎剛（清水教養教育センター）、鉄多加志（海洋学部海洋フロンティア教育センター）、花森功仁子（海洋学部水産学科）

取組の概要

静岡県のサクラエビ漁は、漁業者自らが「プール制」などにより資源管理を行うと同時に、「由比桜えび」を地域ブランドとして確立するなどサクラエビの価格に強い影響力を持っている。

一方で、近年、不漁やブランドの浸透による需要の高まりなどが影響し、サクラエビの価格が急騰している。そのため、県内の加工業者は苦境に立たされ、台湾からの輸入に依存する状況となっている。低価格で比較的品質が高い（静岡県の加工業者の指導による）台湾産加工サクラエビは強力な競合相手であり、サクラエビの市場構造は複雑化している。

本プログラムでは、地域に密着し、各事業者の協力を仰ぎながら、海洋学部の学生とともにサクラエビの生産・加工・流通を横断する総合的な調査研究を行い、理想的なサクラエビの市場形成について考察した。

取組の成果

本プログラムでは、4～6月に、学生とともにサクラエビ漁についての文献調査を行い、サクラエビ漁業者を招いて、サクラエビ漁やプール制、資源管理についての勉強会を行った。7～8月に、由比港漁業協同組合、地元のサクラエビ加工業者などを訪問し、サクラエビ漁業や流通についての現状や課題、地元の様々なニーズについて、ヒアリングを行った。

ヒアリングの結果、漁協および加工業者から、ブランド化やサクラエビの販売戦略を考える上で、日本と台湾のサクラエビの特徴を明らかにしたいとの要望があったため、台湾調査および地元の加工業者の協力を得ながら、サクラエビ加工品の遺伝子分析、官能評価などを学生主体で行った。また、サクラエビに付加価値をつけて販売する方法について考え、サクラエビの透明標本の商品化の検討を行っている。

これらの研究成果は、12月に、第58回全関東大学貿易研究団体連合会および、富士山麓アカデミック&サイエンスフェア2015（静岡県中・東部地域を中心とした大学・短期大学・高等専門学校および企業・行政が連携し、日ごろの学生の研究・開発・ものづくりなどの研究成果を広く紹介するイベント）で学生発表を行った。なお、富士山麓アカデミック&サイエンスフェア2015では、下記の三つのポスター発表を行った。①駿河湾産サクラエビと台湾産サクラエビについての比較検討—官能評価・DNA分析の視点から—、②サクラエビの生態と近縁種—商用利用の視点からの判別—、③サクラエビ市場の現状と課題である。このうち、①のポスターが、優秀ポスター賞を受賞した。

地域志向教育に関する成果としては、参加する学生が、理系、文系の双方いることから、漁業および漁業制度、食文化、水産・食品学の観点など、それぞれ専門的な知識を学科で学習してきており、相互に学びあう機会となり、総合的で実学的な研究となった。

また、地域産業（漁業、加工業）の実態を調査し、サクラエビ市場構造の現状や問題を関係者（漁業者、加工業者）と協議することを通じて、学生の地域産業への理解が深まった。また、その結果を、関係事業者に提示、再議論することで、地域社会・経済への貢献を行った。

4) 地域産業の連携による市民参加型地域振興策の提言

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：山田吉彦（海洋学部海洋文明学科）

共同取組者：斉藤正樹（海洋学部海洋文明学科）

取組の概要

静岡県静岡市清水区における主要産業を確認し、その中でも特に市民の地場産業としての認識が高い、海事産業とホビー産業の現状に関するヒアリング調査を行政担当者、商工会等の団体、市議会議員、一般市民などを対象として実施した。市民の意識の調査は、清水区あるフェルケール博物館を中心に行った。また、海洋学部海洋文明学科の学生によるホビー工場（バンダイ・ホビーセンター）の視察を行い、海洋に視点を置き、ホビー事業の海洋分野への進出について考え、学生とホビー業界との意見交換を行った。

海事産業とホビー産業の連携もしくは、一体化による新たなビジネスの創造を模索した。

静岡市が企画している海事関係展示館のプランとして、ホビー業界の参加を求め、海事産業と連携した企画案を作成した。

市民が積極的に参加する形を意識しプランを作成した。

取組の成果

ホビー業界との協力の元、まったく新しい発想の海事展示館の建設プランを提示した。このプランにおいては、運営にも市民が参加するものとした。

ただし、静岡市清水区においては、未だ、開発に関し資金等を行政に依存する意見が根強く、今後、さらに工夫した建設、運営プランの提示と啓発活動を必要とする。

今回作成したプランに関する市民の興味は強く、今後の展開が期待できると実感した。

5) 熊本における医工連携事業の推進・拡大と地場産業の活性化

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：岩橋正國（基盤工学部医療福祉工学科）

共同取組者：中嶋卓雄、藤井一郎（経営学部経営学科）、渡邊道治（経営学部観光ビジネス学科）、村上祐治、岩崎洋一郎、佐松崇史、高橋将徳、藤本邦昭（基盤工学部電気電子情報工学科）、津田良一、泉隆、大内可人、小佐井博章、中宮俊幸、村田宮彦、綿引哲夫、木村達洋、佐藤綾（基盤工学部医療福祉工学科）、石岩（熊本教養教育センター）

取組の概要

熊本県及び熊本市が中心となり、平成26年度末に県内の自治体・教育機関・企業・医療機関等で構成される「くまもと医工連携推進ネットワーク」が成立し、熊本県内・熊本市内において、医工連携の取り組み機運が高まっている。今回、熊本県及び熊本市より、「くまもと医工連携推進ネットワーク」への参画要請があったことを受け、このネットワークを活用し、熊本校舎の教職員・学生による「医療現場等における医療機器等の現状・ニーズ調査と分析」、「大学開放による地場企業とのセミナー」、「医療・福祉機器開発補助」等の活動を通して、熊本県・熊本市における地場産業の活性化を目指す。

取組の成果

- ①医療機器分野への参入を企図する企業にとっては複数回の学習会や講演会、医療福祉工学科実習室を開放した企業向けセミナーを通して医療現場からの医療機器に対するニーズ、機器開発のヒントなどが得られた。
- ②学生にとっては学習会や講演会に参加することで医療現場の様子、最新の医療機器の情報が得られ専門科目を勉強するのに非常に参考になったと感じる。さらに、医療福祉工学科実習室の開放による企業向けセミナーでは学生が医療機器の構造や操作方法などを説明しており、日頃の学習成果を披露するとともに、より理解が深まったこと及び人前で説明することの難しさを体験でき有意義なセミナーとなった。
- ③本取組を地域住民へ広く報せることで、熊本県・熊本市民の「医工連携分野」に対する理解が高まった。
- ④「くまもと医工連携推進ネットワーク」の推進本部は熊本県、熊本市、熊本大学、熊本商工会議所、熊本県工業連合会であり東海大学は委員を務めている。多くの地場企業が会員となっており、本取組が開催する学習会や講演会はこのネットワークを通じて会員企業に案内しており、会員企業からの参加も多い。本取組が地場企業にも周知されていると感じる。
- ⑤「ウェアラブルデバイスの脈拍計を利用した障がい福祉施設用コミュニケーションツールの開発」及び「深層学習による悪性黒色腫画像識別のための訓練画像の生成」には3年生も参加しており、研究のやり方などを実際に体験でき卒業研究などに結び付けることができた。
- ⑥1件ではあるが地場企業からの技術相談があり、本取組が地場企業活性にも貢献しつつある。

6) 阿蘇地域におけるヤーコンを用いたブランド産地の創造

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：松田靖（農学部応用植物科学科）

共同取組者：村田達郎（農学部応用植物科学科）、椛田聖孝（農学部応用動物科学科）、安田伸（農学部バイオサイエンス学科）、黒田泰弘（工学部生命科学科）

取組の概要

昨年度実施した機能性成分の分析、品種選抜のための試験栽培を継続しながら、新規の取り組みとしてヤーコン産地としてのブランド化を図るため、関係自治体・大学教職員・学生による消費者への生産地域の認識拡大のための取組み、ならびに生産者間の相互理解と技術向上を目的とし、①：ヤーコン収穫体験ツアーの実施、②：現地検討会（生産農家圃場および大学視察）、③：ヤーコン販売促進のためのブックレット作成の3点を中心に活動を実施した。

取組の成果

①ヤーコン収穫体験ツアーの実施（11月、2月、3月）

ヤーコン収穫期は11月から3月であるが、12月、1月は参加者数が少ないことが予想されたため、まず11月28日にモニターツアーを実施した。その結果を基に内容を見直し、2月28日および3月8日に体験ツアーの実施を予定している。

11月のモニターツアー参加者（募集人数20名、参加者20名（子供8名を含む）（アンケート回答者12名）にアンケート調査を行ったところ、「ヤーコンをなんとなく知っている」、「よく知らない」とする回答が80%を超え、「実際に食べたことがない」とする回答も50%となるなど、多くの参加者が興味はあるが体験がないことが明らかとなった。また、収穫体験、ヤーコン料理中心の昼食ならびに大学教員・

学生によるヤーコンの説明によってヤーコンそのものを知るとともに、どこで生産・販売されているかを知ることができたとの感想もあり、ブランド産地としてのイメージ定着につながる取組みとして有効であると判断できた。

2月および3月の開催分は、今後の開催日程の参考とするため日曜および平日の開催、座禅・ヤーコンを使用した精進料理との組合せ等、モニターツアーの一部を変更し、その影響について意見を募る。

②現地検討会の実施(9月、11月)

9月16日に生産者30名、大学教員3名、学生4名、自治体関係者4名が参加し、生産農家の圃場における現地検討会を実施し、2軒の生産農家の栽培状況を見学した。その後、教員および学生から栽培特性、ポリフェノール含量の変化に及ぼす栽培環境の影響およびヤーコン茎葉部を材料としたサイレージ製造について説明がなされた。

さらに11月12日には、生産者6名、自治体関係者1名が阿蘇校舎の学内圃場の視察に訪れ、栽培法および栽培環境によるヤーコン塊根の収量および形態の違いを実感することができた。このように栽培技術を共有することで地域全体での生産物の品質向上を目指すとともに、6次産業化に向けた取組みに対する重要性を理解していただくことにもつながった。

③ブックレット作成

消費者および生産者に対するヤーコンの持つ機能性、特徴の理解を進めるために、学生デザインによるブックレットの作成を行った。A6サイズ16ページからなるブックレット1900部を印刷しており、これらを体験ツアー参加者、自治体農家、販売をしている道の駅へ配布する。販売促進につなげるとともにブランド産地としてのイメージ定着を図る。

7) U・I ターン就職促進のための遠隔インターンシッププログラムの開発

代表者(所属)、共同取組者(所属)

代表者：長幸平(情報教育センター・情報理工学部情報科学科)

共同取組者：平野葉一(文学部ヨーロッパ文明学科)、前田成東(政治経済学部政治学科)、園田由紀子(チャレンジセンター)、坂田圭司、白澤秀剛(情報教育センター)

取組の概要

近年の地方/首都圏の格差拡大により、地方出身の大学生が首都圏企業へ就職する傾向が強くなっており、地方企業の人材不足が深刻になってきている。地方出身の大学生が就職先に地元企業を選択しない理由の第1位は「志望する企業がないから(35.2%)」となっており、地方企業は認知度も低く、インターンシップへの参加も距離的制約で困難になっている。本学は、北海道や九州からも多数の学生を受け入れており、潜在的に地元就職を希望する学生も多いことが予想される。そこで本プロジェクトでは、全国初となるWeb会議システムを用いた遠隔インターンシッププログラムを企業や関連NPO法人と共同で開発し、U・Iターン就職学生の増大と地域産業活性化人材の育成を目的とする。

取組の成果

本取組の結果、3つの成果を得ることができた。最大の成果は、Web会議システムを使用したインターンシップが効果的であり、低コストで実現可能であることを実証できたことである。本取組では2種類のインターンシッププログラムを準備した。1つは、事前の企業調査を行った学生が、Web会議上で企業の社長、部長、現場責任者などにインタビューを行い、企業紹介記事を作成するという「取材型」インターンシッププログラムである。もう一つは、最初にWeb会議上で企業側が企業説明、商品説明、解決したい問題点(課題)を提示し、学生が約3週間で解決策を考え、再びWeb会議上で解決策のプレゼン

テーションを行う「課題型」インターンシッププログラムである。本取組では、この2種類のインターンシップのいずれも計画通りに実施でき、学生側のみならず企業側からも高評価を得た。熊本や北海道の企業においては、社長室に接続したWeb会議上で社長と学生が直接会話するなど、通常の会社訪問では実現が難しいと思われることも実現できた。

2つ目の成果は、インターンシップ前に学生が備えておくべきコミュニケーションスキルおよびその必要性に関する知見を得られたことである。通常のインターンシップは企業内で行われるため、学生が企業側からどのような評価をされているのかを知ることはできない。しかし、今回は大学主導での実施であったことと、プログラム開発ということであったことなどにより、企業側から、学生のコミュニケーションスキルの十分な点や不足している点、事前研修の必要な点などについて十分な議論や、意見交換をすることができた。この成果は、今後の就職指導にとっても非常に有益な情報であった。

3つ目の成果は、授業への組込の可能性が開けた点である。Web会議システムであれば、プロジェクトとネットワークのある教室であれば接続可能であり、また、大学教育に貢献したいと考えている企業も多いことが分かった。今回は予算などの都合で北海道、熊本、神奈川の3企業との接続であったが、システム的には全国の企業との接続が可能で、実践的な産学連携授業の実現に道を開く成果であったといえる。

8) 生命科学実習と研究室開放・サイエンスカフェによる多世代間交流促進

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：阿部幸一郎（医学部医学科基礎医学系）

共同取組者：石井直明、秦野伸二（医学部医学科基礎医学系）

協力者：安田佳代（生命科学統合支援センター）、杉崎久美子（医学部分子生命科学阿部研究室）、諏訪間伸、江田茉莉子、畠中良知（伊勢原市立子ども科学館）

取組の概要

iPS細胞の発見などにより、我が国では医学研究に対して市民の関心が高まっている。しかし、センセーショナルな報道によって科学研究が批判される場面も多い。今こそ、研究の現場と市民が交流してお互いの理解を深める時である。本学医学部は附属病院において、医療行為を通して一般社会に多大な貢献をしている。しかし、その研究内容は地域社会において広く理解されていない。そこで本課題では、伊勢原市立子ども科学館と連携し、小中学生と保護者を対象とした生命科学を扱った実習を行って市民との交流を図る。さらに、医学部の研究室の一部を開放し見学ツアーを開催、また、リラックスした雰囲気ですべて自由に質問や談話ができるように「サイエンスカフェ」を開催し、市民の医学研究への理解を深める。

取組の成果

地域小学校高学年生と中学校生（計16名）を対象とし、伊勢原市立子ども科学館で7月31日に行われた生命科学実習では、自身の口腔内の細胞からDNAを抽出する実験や、研究で用いられる線虫やマウスの標本などを用いて実験や観察を行った。このような実験・実習により、子供達からは実験操作や観察が楽しかった、難しかったという感想とともに、DNAに対しての疑問、生態への興味、実験操作に対しての質問があった。また、翌日には参加者とその保護者を伊勢原校舎へ招待し、研究内容の説明とともに研究室とそこで行われている実験の見学ツアーが行われた。子供達は初めて見る研究室と実験機器に驚き、保護者は病院の業務のみならず、基礎研究にも力を入れているという印象を持ったとの反応があった。また、医学部は敷居が高いイメージ、難しそうなイメージであったが、教員や学生と気さくに

話したことにより明るい印象に変わったとの意見もあり、地域住民へのイメージアップにも繋がったとみられる。さらに、今回は「研究者（医学部）への道」というテーマで、サイエンスカフェを催した。参加者からの質問に対し、大学院生や学生らが医学研究や医師を目指したきっかけや、子供時代の体験談や受験勉強などについて話した。また会場では、教員や大学院生によるポスター発表も行い、最新の研究を紹介した。保護者からは、進路を考え始める中高生にも見せてあげたいと思った、医学生や研究者と気軽に話ができてとても良かった、などのコメントが寄せられた。

これらの活動に対して、イベント終了後のアンケートでは、参加した子供から「僕も将来東海大学に来たいです。そしてこの2日間よりさらに科学のことやミュータントのことを学びたいです。」などのコメントも寄せられた。また、イベントの参加者の中には昨年度に続いて今年度も参加したりピーターもおり、徐々に本活動が軌道に乗ってきたことが実感できた。これら2日間の実習と研究室見学には、教職員に加えて学部生と大学院生が参加した。彼らに対するアンケート調査より、子供達の態度や姿勢により自分自身の勉強への意欲が高まったという意見が多く寄せられた。

このように、イベントに参加した親子だけでなく、参加者全体が今回のイベントが良い刺激になり自分自身の興味、好奇心、課題を考えるきっかけになったことがわかった。

9) 科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：岡田工（チャレンジセンター）

共同取組者：内田晴久（教養学部人間環境学科自然環境課程）、平野葉一（文学部ヨーロッパ文明学科）、石原良美、関根嘉香（理学部化学科）、山本義郎（理学部数学科）、土屋守正（理学部情報数理学科）、藤城武彦（理学部物理学科）、及川義道（理学部基礎教育研究室）、渋谷猛久（工学部光・画像工学科）、瀧川洋二、安森偉郎（教育研究所）、中嶋卓雄（経営学部経営学科）、村上祐治（基盤工学部電気電子情報工学科）、村田浩平（農学部応用植物科学科）、千賀康弘（海洋学部海洋地球科学科）、小林俊行（清水教養教育センター）、四方周輔（札幌教養教育センター）、河野時廣（生物学部海洋生物科学科）

取組の概要

東海大学では、これまでに地域の理数系教育の推進に向け、学内の教職員と学生による地域貢献活動が各地で展開されてきた。地域の子どもたちを対象とした科学教室の開催は、子ども達の理系へ興味を広げ、日本にとって重要となる理数系人材の育成へとつながって行く。本事業では、大学が地（知）の拠点として地域の初等中等教育と連携し、学生たちによる科学教室における科学コミュニケーションを通じて、教員や学生と地域の子ども達や住民たちとの交流を図り、大学開放を進めるプロジェクトである。本年度は、湘南校舎を初め、熊本校舎、清水校舎及び札幌校舎にて科学教室を開催し、地域との連携の在り方を検討し、あるべき姿を提案していく。また、担当者同士の情報交換と連携を深めることで、学生の地域連携に対する理解をさらに促し、同時に、学生自身の成長につなげて行くプロジェクトである。

取組の成果

地域の子ども達と地域住民が楽しむことができる科学イベントを各校舎にて開催した。6月13,14日（札幌校舎）「青少年のための科学の祭典 in 北海道 2015」をはじめ、7月には2件、8月には9日（熊本校舎）「世界一行きたい科学広場 in 熊本」や（湘南校舎）「親と子の科学教室」を含む5件、9月には19日（清水校舎）「みんなでつなぐ元気が出るドリームサイエンス 2015 in Shimizu」を含む2件、10月には、「サイエンスラボ札幌」など4件に11月は7日（港区高輪区民センター）「輪い輪いまつり」をはじ

め5件の地域や小学校が主催するイベントにも参加した。また、12月13日に大学推進プロジェクトの「安心安全」と同時開催の形で、湘南校舎で「世界一行きたい科学広場 in 東海大学湘南校舎 2015winter」を開催した。12月は「サイエンスラボ札幌」も開催した。2月には「サイエンスラボ札幌」を開催し、27日には、「青少年のための科学の祭典」を準備している。また、3月9日には、海外研修航海から衛星中継される皆既日食映像を地域の方々に観望してもらうイベントも準備している。

科学コミュニケーション活動を拡大させることにより、開かれた大学、開かれた研究室のイメージが浸透した。地(知)の拠点である大学が、子ども達にわかりやすい、親しみやすい大学として認知され、地域住民からも信頼を深めることができた。また、教員および学生のボランティア活動の在り方や地域ニーズとの連携の必要性がより明確になり、学生が社会連携の意義を自覚できるよい経験となる。特に、教員志望学生にとっては教育力向上を図る具体的なプログラムの構築につながる。同時に、チャレンジセンターの活動のように、学生どうしの連携や教員の関わり方などについて、実践教育の場を広げていくことができた。



6月13,14日(札幌キャンパス)
「青少年のための科学の祭典
in 北海道 2015」【札幌・科学部】



8月9日(熊本キャンパス)
「世界一行きたい科学広場 in 熊本」
【湘南サイエンスコミュニケーター】



8月22日(湘南キャンパス)
「親と子の科学教室」

10) 世代を超えた知の共有と育成を目指した地域連動型教育プログラムの構築

代表者(所属)、共同取組者(所属)

代表者：福崎稔(高輪教養教育センター)

共同取組者：渡辺晴美、福原雅朗(情報通信学部組込みソフトウェア工学科)、濱本和彦(情報通信学部情報メディア学科)、小村和彦(情報通信学部経営システム工学科)、村松香織、田丸智也、田中紀代子(高輪教養教育センター)、千賀康弘(海洋学部海洋地球科学科)

取組の概要

本研究における課題は、①子どもの安全な居場所の確保、②子どもの理科離れ対策、③地域シニア層の活動場所の提供、④地域環境の付加価値の向上、⑤学生のコミュニケーション力の向上である。

昨年に引き続き上記の課題に取り組んでいる。昨年度開始した子どもの安全な居場所は、港区高輪地区総合支所、児童館の協力を得て子どもカレッジとして、子ども教育支援プログラムの新規開拓と運営定着を図っている。今年度から、新たに二つの授業コンテンツを追加して実践している。子どもが自由に集う空間の運用は利用者のさらなる増加を目指して活動している。また大学の専門知識を活用した教育の場としても小学生・保護者に対して定着してきた。

さらに今年度は地域シニア層の活動場所を提供する方策にも力を入れている。新たに港区在住のシニア層との交流会を立ち上げた。また地域への大学開放の一環として、学生と近隣町会との交流を深める計画を実践した。この計画では他のTo-Collaboプログラムとの協働による取り組みも模索している。このような取り組みによって、子どもカレッジを活動拠点として、大学生、小学生および近隣のシニア人材が一体となった活動が自然に生まれるような環境整備を目指している。

取組の成果

子どもカレッジの取り組みでは、チャレンジセンター科目、学科ゼミ科目の中で、すべて正規の授業科目として実施した。プロジェクト実践B,C,Dとして、それぞれ「音あそび」、「体育あそび」、「英語あそび」、また情報通信学部4学科のゼミ、卒業研究科目の中で、子どもカレッジに参加している児童向けの教育プログラムや高輪地域自治体、町会主体の教育プログラム、イベントに参加し、アクティブラーニングの実践的教育プログラムとして実施することができた。開講準備や広報活動、児童との関わりを通じて、学生のvoluntarismの醸成に役立っている。今後も参加学生、利用児童の増加を目指して運営する。

また今年度は湘南校舎チャレンジプロジェクトであるサイエンスコミュニケーターと協力して、高輪台小学校PTAイベント「遊ぼう！学ぼう！高輪台」、高輪地区総合支所「輪い輪いまつり・あっぷリング高輪フェスティバル」に授業科目の取り組みとして参加した。さらにTo-Collabo「大学推進プロジェクト・安全安心プロジェクト」、「科学コミュニケーション活動を通じた地域活性化プロジェクト」、近隣3商店会16町会の協力の協力を得て「高輪まつり2015-防災・減災を考える交流会-」を開催した。

新規の取り組みであるシニア層の活動場所の提供に関しては、港区役所高輪総合支所、シルバー人材センター、介護予防センター、明治学院大学の協力を得て、2015年9月1日より、港区交流活動ネットワーク交流会として毎月水曜日に定例会の場を実施している。また子どもカレッジと共存して地域シニア層が利用することで、世代を超えた知の育成を実現する場としての成長が始まっている。



高輪まつり 2015

11) 地域連携を通じた包括的環境アウェアネス・プログラムの構築

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：千賀康弘（海洋学部海洋地球科学科）

共同取組者：川崎一平（海洋学部海洋文明学科）、田中博通、仁木将人、李銀姫（海洋学部環境社会学科）、馬場久紀（海洋学部海洋地球科学科）、秋山信彦、松浦弘行（海洋学部水産学科生物生産学専攻）、砂原俊之（海洋学部航海工学科海洋機械工学専攻）、占部正承、石井洋（清水教養教育センター）、長尾年恭（海洋研究所）

取組の概要

海洋学部では1995年から静岡市との交流事業として、小学生を対象とした各種体験学習を実施してきた。2013年度からは静岡市との連携のもとで一般市民を対象とした望星丸洋上セミナーや地域公開セミナーを実施してきた。2014年度末に本学と静岡市との間で包括連携協定が締結されたことに伴い、これら諸企画を「環境」をキーワードとして包括し、小学生から年配者に至る多世代を対象とした学習プログラムの構築を進める。海洋学部JM00Cプログラムの経験を活かして「反転授業」方式の学習プログラムも構築する。実施に当たっては、清水校舎の地勢的特徴及び海洋学部の教育研究の特色を活かして、

「駿河湾の環境」、「津波防災」、「海洋生物」、「沿岸域環境」の4テーマを立て、幅広い「環境アウェアネス（気づき）」活動を企画・推進する。具体的には次の4プログラムを実施した。

- ①「洋上で考える環境」（10/18）：一般市民を対象として「駿河湾をめぐる水といきもの」を主テーマとして、駿河湾内での望星丸洋上セミナーを実施。公募による静岡市在住の一般市民74名の参加により、水深1000mまでのCTD観測、プランクトン採取を行った。教職員13名、学生22名が案内と解説を行い、駿河湾の魅力を伝えた。
- ②「海辺で考える環境」（7/27）：市内の小学生30名が参加し、三保の海浜植物観察会を開催した。海浜植物に関する学習会、現場観察を実施、教員2名、学生8名が解説。
- ③「海のいきものから考える環境」（8/5, 3/6）：プランクトン観察会（8/5）を小中学生と保護者34名、環境大学受講生20名の参加者で実施。教員3名、学生5名が解説した。3/6にはシロウオ観察会を市内の小学生と保護者40名を対象に実施予定。ここでは山と川と海のつながりを解説し、静岡市の自然のすばらしさを伝える。
- ④「防災から考える環境」（8/30）：一般市民を対象として「駿河湾を学び地域の防災を考える-三保半島の地震・津波に備えて」をテーマとして、静岡市危機管理室から講師1名を招き、学内の3教員が講演。さらに学内施設を使って津波の破壊力デモ実験を行った。51名の一般参加者があり、アンケートでは86%の参加者から勉強になったとの感想があった。

取組の成果

- ①「洋上で考える環境」：作業補助・解説をする本学学生の対応について、参加者からの評価が高い。研究成果還元という地域貢献において、学生が主体的役割を果たしていく可能性を示している。
- ②「海辺で考える環境」③「海の生きものから考える環境」：現地観察を含む環境学習プログラムは初等中等教育機関で作成・実施することが困難であり、静岡市と本学が連携した取組みの重要性・貢献度は大きい。さらに、清水校舎は幼小中高の付属教育機関が併設されていることから、海洋環境教育が一貫教育の中核的機能を果たすことが期待できる。
- ④「防災から考える環境」：東海・東南海地震の発生を危惧されている静岡において、地震・津波に関する正しい知識と的確な避難方法を提供することが大学に期待されており、当該地域への高い波及効果が想定される。

12) 地域—大学の連携を通じた知の「生活化」／生活の「知識化」プロジェクト

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：植田俊（国際文化学部地域創造学科）

共同取組者：ハミルトン・マーク、杉浦理恵、平木隆之（国際文化学部国際コミュニケーション学科）、中尾紀行、藤森修、田川正毅（国際文化学部デザイン文化学科）、島崎百恵、中西健一郎、塚本未来、服部正明（国際文化学部地域創造学科）

取組の概要

本事業は、従来から札幌校舎内で取り組まれてきた地域連携活動を継承・発展させ、地域住民の「生活」に根ざし、その発展に貢献しうる新たな「地（知）」を地域—大学との協働を通じて構築する「地（知）の生活化」を目指すものである。

札幌市南区の各町内会連合会、商店街、まちづくりセンター、包括支援センター、民間団体（札幌軟石文化を語る会、等）などと協働しつつ、1) 札幌軟石未来プロジェクト、2) “南区暮らし” 活性化プロジェクト、3) 札幌フォトラリープロジェクトの3事業に取り組んだ。

取組の成果

1) 札幌軟石未来プロジェクト

担当教員の指導の元、作品のデザイン、協力・支援して下さる企業へのプレゼンテーション、制作作業を経て、「札幌手づくりフェスティバル」(2015年10月9日・10日)へ出品した。また札幌東急ハンズで開催された「ISHIYAMA HANDS」(2016年1月9日～11日)に、協働した企業と一緒に作品を展示し、好評を得た。当初予定していなかったが、「キッズパーク in 真駒内」で、当該学生たちが軟石作品づくりのワークショップも企画・実践した(2015年10月24日、25日)。またウォーキングマップは、モバイルフォンフォトラリープロジェクトの成果として作成中のマップとコラボレーションし、内容をより豊かにした(成果物は3月下旬に完成予定)。

2) “南区暮らし”活性化プロジェクト

東海大学第四高校の授業「知的財産教育」とコラボレーションし、アイコンづくりに取り組んだ。高校生が素案を作成し、大学生がトレースし、デザイン会社に最終校正を依頼し完成させた。アイコンの形・内容は、連携している藻南商店街の個店へアンケートを行い、要望等を伺って作成の際の道標とした。マップ作りは、大学生・教職員で作成メンバーを組織し、作成に当たった。2月末に、アイコンとマップが一つになった「藻南商店街グローバルマップ(仮)」が完成する。順次、外国語への翻訳を進めていき、商店街個店および外国人観光客が多く滞在する、地域内のホテルなどで地域観光案内の資料として活用してもらう予定となっている。

3) 札幌モバイルフォン・フォトラリープロジェクト

昨年度からの継続事業として、スマートフォン・タブレットを使用しながら札幌市南区の既存の名所巡りと新たな名所の発見に取り組んだ。2015年10月17日(土)に、参加者約40名(留学生:9名、一般:2名を含む)でラリーイベントを実施した。内容は、①グループでのロゲイニング、②SNSの「LINE」を使ったポイント集計、③帰校後、グループ毎にプレゼンテーション。集まった写真等を集約してオンライン上でマップにするシステムづくりを目指した。成果物としては、1)軟石未来プロジェクトの活動ともコラボレーションし、「南区ロゲイニングマップ(仮)」としてまとめる作業に取りかかっている。

13) 「東海大学市民健康スポーツ大学」を中心とした市民の健康づくりの支援活動

(市民会員の身体活動量と心身の健康度の関連性の分析及び学生と市民との世代間交流活動)

代表者(所属)、共同取組者(所属)

代表者: 沓澤智子(健康科学部看護学科)

共同取組者: 松木秀明、池内真弓、石井美里(健康科学部看護学科)、谷口幸一、東奈美(健康科学部社会福祉学科)、吉川政夫(体育学部生涯スポーツ学科)

取組の概要

市民会員の身体活動量と心身の健康度の関連性の分析

健康科学部は体育学部生涯スポーツ学科とともに、伊勢原市と連携し、東海大学市民健康スポーツ大学を毎年6月～5月まで1年間行っている。これは、会員登録をした伊勢原市民約100名を対象に、単にスポーツの実践のみでなく、健康・福祉に関する講演や実技を通して、健康維持・増進を促進することを目的として、年間24回の健康講座およびスポーツ指導を行っている。この中のプログラムとして、市民会員の健康度の測定および毎日の歩数の計測を行っている。今年度は、東海大学市民健康

スポーツ大学の市民会員の日常活動状況の実態調査と、体格・骨密度・メンタルヘルスとの関係を明らかにし、市民会員にフィードバックする。これらのデータの活用に関しては、本クラブ開講以来、市民の健康測定データの管理ならびに本学の教育と研究に資することの「説明と同意の文書」を取り交わしている。

学生と市民との世代間交流活動

東海大学市民健康スポーツ大学は3年継続すると、修了することになっている。昨年より修了した会員が、スポーツの継続と会員の交流をはかるために、楽遊会というグループを作り活動している。この会員と、健康科学部の在学生との世代間交流活動を企画して、学生の教育と市民会員の生き甲斐活動に役立てていく。具体的には、社会福祉学科の「地域保健福祉活動論」（春セメ、履修学生数 56名）、「生涯健康活動論」（秋セメ、履修学生数 43名）において、市民が授業に参加し、グループディスカッションすることを企画した。

取組の成果

市民会員の身体活動量と心身の健康度の関連性の分析

2012年度～2014年度の本健康クラブ市民会員の体格・体組成・血圧・1日の平均歩数などについて、各年度について比較したところ、2012年度と2014年度は差がなく、健康度が維持されていた。市民会員は60歳以上がほとんどで、スポーツ習慣と健康的な生活習慣を身に着けたことにより、健康寿命を延ばすことにつながる可能性が高い。

2009年～2015年の調査で測定データが得られた対象者について、GHQ60によるA(身体的症状)、B(不満と不眠)、C(社会的活動障害)の「問題のない群」と「注意を要する群」間に有意差が認められた万歩計の項目はなかったが、D(うつ傾向)における「問題のない群」は、1日当たりの積算歩数(歩)と1日当たりの歩行による脂肪燃焼量(g)において、「注意を要する群」に比べ有意に高値($p < 0.05$ または $p < 0.01$)を示した。(To-Collabo プログラム Web サイト「To-Collabo ケース」参照)

「うつ傾向」を示すものは、内にこもりやすく、運動量が少なくなることが示唆され、今後、本健康クラブに参加することにより、外出する機会や、友人と談笑する機会が増加することによって、うつ傾向を改善し、心身共に健康を維持して頂きたいと考えている。

学生と市民との世代間交流活動

若者も高齢世代もお互いを知らないが、知りたがっていることが、この取り組みを通じて感じられた。学生たちにとっては、おじいさん・おばあさんと同じ年代の方々から、人生の来し方の語りや人生経験から得た知恵を、言葉と触れ合いを通じて、伝えていただき、学生自身の人生を考えるきっかけになっている。市民会員にとって、学生とコミュニケーションをとることが楽しみであり、活動を継続していく魅力の一つになる。

14) 留学生と日本人学生との協働による地元貢献活動の国際化の試み

代表者(所属)、共同取組者(所属)

代表者：高雄元晴(情報理工学部情報科学科)

共同取組者：尾関智子(情報理工学部情報科学科)、斉木ゆかり、西山友恵(国際教育センター)

取組の概要

日本の地域文化の中で、神輿渡御は宗教的な意義を越えて年長者から若者への教育の場、そして若者が新しい技術と見識を導入することを通じて地域社会を進化させる場として古来から機能してきた。しかし、地域の都市化にともない神輿渡御のこれらの機能は急速に喪失されつつある。これは神輿渡御に

関わる集団の老齢化と固定化、本来新たに参加することが期待される若者集団の減少と地域社会からの分離が主な要因である。本プロジェクトは、若者集団として留学生を含む本学学生が地域文化に参加し、学ぶとともに、大学で学んだ IT やそれぞれの母国語の言語による広報活動を通じ、世界に向けて情報発信をする。

取組の成果

昨年度採択課題「地域に学び地域に貢献する情報技術教育システムの構築」（代表：高雄元晴教授）に引き続き、内容を拡充させて本年度の課題に取り組んだ。昨年度は日本人学生を対象に地元神輿団体の振興協力を行ってきたが、本年度は新たに日本における地域伝統文化の理解と日本語学習の促進を期して、留学生にも積極的に参加させる取り組みを行った。また、将来的に本プロジェクトを教員主体でなく学生たちの自主プログラムとして昇華させる試みとして、チャレンジセンター教育プログラムとの連携に取り組んだ。本プログラムで企画した様々なイベントおよび取り組みを以下に紹介する。

- 1) 今泉神社神輿保存会の自主イベントの準備および実施への学生の参加。
- 2) 国際フェア日本ブースにおける神輿の展示と学生たちによる紹介。
- 3) 日本語スピーチコンテストの際、幕間劇として「神輿紹介劇」を留学生たちが企画、上演。
- 4) 留学生有志による「多言語神輿渡御紹介パンフレット」の制作。
- 5) 神輿の広報および神輿渡御の安全確保を目的とした学生たちによるアプリの開発。

上記のプロジェクトを教員のアドバイスを受けながら学生たちが自主的に行い、多くの学びと経験、そして地域貢献に対する認識を得ることができたと信じる。今後、持続可能な形で、学生たちが創意工夫のもと神輿渡御など地域の伝統文化の保護と振興に貢献する風土を本学の中で醸成して行きたい。また、留学生にとっても伝統文化の保護に自ら進んで取り組むことは、日本語の習熟に役立つだけでなく、教科書や教材では決して知りえない日本文化を体験的に学ぶ機会となる。将来的にカリキュラムとの連携等を視野に入れてありかたを考えていきたい。

15) 世代間共生にむけた環境 NPO との連携による環境教育の実践と検討

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：藤野裕弘（教養学部人間環境学科自然環境課程）

共同取組者：北野忠、藤吉正明（教養学部人間環境学科自然環境課程）、特定非営利法人東海大学地域環境ネットワーク会員

取組の概要

環境 NPO 及び学部学生と協力し、地域の担い手である小・中学生が世代間共生を図りながら地域連携を推進できる河川地域環境教育の実践・検討を行なう。

- ①「河川における地域環境教育」の実践と検討
 - ①-1 小学生対象の環境教育実践
 - ①-2 中学生対象の環境教育実践と検討
- ②NPO、流域住民及び学生との里川研究会の実施
- ③HP の作成

取組の成果

一部取組みにおいては準備が十分でない面も散見され、特に①について一つの実施ごとの参加者は少

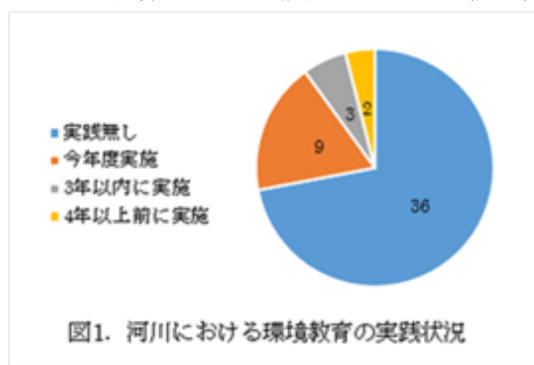
なくなりました。しかし、事後アンケートなどから、「次回も参加したい」等それぞれの参加者からの評価は非常に高く、我々が実施す実施の重要性が改めて認識された。

○地域社会貢献について

伊勢原市比々多小学校においては、来年度以後も継続した実施を依頼され、近隣小学校との連携も視野に入れた活動を提案され、また、付属小学校でも、今年度の科学クラブでの取り組みから、来年度以降の計画について検討が始まるなど、他地域でもこれら取り組み必要とされていると共に、われわれが実践している活動が実施可能であり、更に河川や水を中心とした河川環境教育を通じた地域連携の輪が広がる可能性が示唆された。

加えて、各地域での各地域の担い手である小・中学生への河川環境意識への醸成にもつなげることができた。

また、今後の活動展開をふまえ同水系流域において金目川に比較的近い場所の小・中・高等学校へアンケート調査を行った。その結果、流域における学校のおよそ70%が河川に関連した環境教育を行っていないことが分かった（図1）。理由として、安全性の確保が困難であること、カリキュラムに組み込む余裕がないこと、1回の授業内で川に行くことが時間的に困難であること、等の回答が得られた。環境教育実践においては学校側の負担を減らす工夫が必要である。また、実践内容においては文化的要素についての授業が少ない傾向にあった（図2）。



○教育的効果について

活動に参加する NPO 学生において、2年生以下では自身が小・中学生時代に体験できなかったことが体験でき、非常に貴重な体験であったとコメントする学生もおり、今後の卒業研究のみならず、3年生以上は観察会内で卒業研究の一部を実施するなど大きな地域志向教育効果を見出すことが出来た。



これらのことから、今後の展開を行うに当たり、文化や歴史、生活等を含めて総合的に川を理解するプログラムを設定し、各世代と交流を図りながら実際の教科の学習内容とリンクさせて学習効果を高める必要がある。今年度実施した、「川の勉強会」のような学習の機会を学校外の団体と連携して企画し、学校のカリキュラムや授業進度と連動させて行うことで、学校側の負担を減らし授業として取り入れ易くする必要があると考える。また、水道局や博物館の学芸員、市民団体等と連携することで世代間の共生を図り、世代を超えて保全活動に取り組む地域コミュニティの創出を促す。また、金目川独自のガイドブック等副教材を作成して環境教育を行う上で必要な情報を学校・地域コミュニティが共有できると考えられる。

16) パブリック・アチーブメント教育を通じた地域連動による人づくり

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：東恵子（海洋学部環境社会学科）

共同取組者：小林俊行（清水教養教育センター）

取組の概要

2015年度は、2014年度の成果を踏まえ富士山世界遺産登録後観光交流人口の急激な増加により、三保松原の自然環境と観光振興のバランスに基づく地域づくりの在り方は急務である。そこで、以前から取組みを行っている自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ「持続的な観光」を主軸に捉え、若年層を主体とするパブリックワークプロジェクトを地元自治体（静岡県・静岡市）、地元住民、観光業、企業等の協働参画によりパブリック・アチーブメント教育として展開した。本取組みの目的は、地域の社会問題に対して意思決定を行うパブリック・アチーブメント教育を通じ、若年層を中心とした地域連動による人づくりを行うことにある。この目的を達成するために「三保松原の単発観光や観光客の急激な増加による交通渋滞、マナー問題等」を導出し、これらの課題解決に向けたプロジェクトを設定した。

特に本年度はプロジェクト参加者の意識調査を行い、テキストマイニング等を含む意識変化の分析を行い、指標化、パブリック・アチーブメント教育による人材育成プログラム効果を検証した。

- 1) 世界遺産三保松原-松原の継承と地域振興
- 2) 清水港湾緑地「折戸潮彩公園」の実現にむけた学生達の挑戦 パートⅡ
- 3) 三保チャリマップを活かした周遊型観光（マリンスポーツ、個人飲食店、特産品の活用等）
- 4) ドリームサイエンス 2015 in Shimizu へ出展
- 5) 東静岡駅周辺の文化力拠点としての景観・まちづくり

取組の成果

「世界遺産三保松原-松原の継承と地域振興」では、三保松原の貴重な松林保全対策を適切に学ぶことを目的に講演会、駆除に即効性をもつ薬剤散布ラジコンヘリコプターのデモンストレーションや松葉カキ活動、幼松の植樹等の知識と実践を学内外を対象に一年間通して行った。プロジェクト終了後のアンケート調査からは、講義と共に実践活動を行うことにより活動の意義が理解できるという回答である。

また、世界遺産登録直後は急増した観光客であるが、3年経つ現在では観光客の減少、滞在時間が1時間弱と著しい単発観光である。また観光客のマナーの悪さに地元住民は疲弊している。この課題を捉え学生達による松原保全活動団体調査、観光客へのヒアリング等を行った。加えて静岡市の依頼により「御穂神社及び神の道周辺道路における交通安全対策ワークショップ」に地元連合自治会、NPO三保松原・羽衣村、静岡青年会、フューチャーセンター、海洋学部大学生、静岡市行政担当者の参加36名による3回のワークショップを開催し、御穂神社、神の道の道路整備を年度末までに検討、課題解決策を導き出す。ビジターセンター、駐車場、羽衣公園が整備予定であり、よりよい世界遺産コアゾーンの整備に向け、次年度には、社会実験を行い検証し、より改善していく予定である。



次に「清水港湾緑地折戸潮彩公園プロジェクト」では、静岡県清水港管理局の依頼をうけて11000㎡の港湾緑地整備に向け、折戸地区自治会、PTA、子供会、国・県・市の行政担当者と共に計12回のワークショップを開催、開催時には学生が資料を作成、ファシリテーターを務めている。基本設計、実施設計、基盤整備が終わり、計画・予算・整備の公共インフラ整備の工程とその後の維持管理を通し授業外の取組として専門性を学び、利害関係者における合意形成、アドボガシー・プランニングを実践することができた。整備段階では、広い芝生広場を4月からエスパルスグラウンドの種芝を育て、6月に2万5千ポットを地元住民、海技短大、翔洋高校、海洋学部の学生、企業から340人が集まり芝植を行った。それまでは限られたワークショップメンバーにより、より良い公園を目指してきたが、大勢の人々による芝植を目の当たりにし、学生達は、それまでの試行錯誤の取組みによる苦労が一気に払拭され、地域のための公園づくりに携われたことへの喜びを経験している。いよいよ2016年3月23日完成式典が行われる。今後は、後輩達のワークショップ参加により地域と共に末永く利用され愛される公園づくりの引き継ぎも決まっている。

また、「ドリームサイエンス2015 in Shimizu へ出展」は、静岡市と協働の取組により2ブースを出展した。静岡市経済局清水港振興課とは「富国有徳の美しいみなとづくり」では、学生達による来場者への清水港・みなと色彩計画により産官学民の協働の取組みのパネル、色彩のサイエンス等の紹介、来場小学生には翔洋高校生と共に帆船模型の体験も行った。また、静岡市歴史文化課と治山林道課と共に「富士山世界遺産三保松原の保全」世界遺産三保松原の説明パネル、一年間を通じた松害対策の模型やマダラカミキリ標本を使用し松原保全を啓発する活動を行う2ブースを出展した。最後に「東静岡駅周辺の文化力拠点としての景観・まちづくり」は、東静岡駅周辺に静岡の文化力拠点として相応しいまちづくりを目的に静岡市都市局建築総務課の協力により、東静岡駅周辺の景観まちづくりアンケートを行った。学生主体にアンケート調査設計、東静岡駅周辺住民を対象に2091戸にアンケート調査を実施した。ポスティング配布、収集、集計、結果分析を行い、静岡市建築総務課担当職員とタグを組む現況調査等を協働で進めている。専門知識を習得しながら、景観・色彩分析を行い、今後は東静岡駅周辺地区の景観、緑化計画の策定や居住者参加型のまちづくりの実現を展開していく。学生達は、アンケート調査集計過程を通し居住者から住民の満足、重要度、不満や期待感などの住民のリアリティに直面し、モノの見方、考え方に変化が表れている。市担当職員との意見交換を繰り返す資料作成を通じジョブ・トレーニングとしてもとても有益であることがわかった。



以上の2015年5月～12月3日までの上記プロジェクトの参加者に対し意識調査を行い、

プロジェクト参加意識調査結果

2015年度は、パブリックアチーブメント教育により「三保松原保全」「折戸潮彩公園整備」「ドリームサイエンス出展」等の様々なプロジェクト実施、参加により展開した。

現在までの実施プロジェクト参加者に意識調査を行い、意識変化を分析、指標化を行った

■三保松原保全についての取り組み

- 2015年5月24日(土)三保松原の松害に関する講演と薬剤散布ラジコンヘリコプターのデモンストレーション
- 2015年5月25日(日)三保地区自治会活動の松葉カキ活動
- 2015年6月20日(土)三保松原の松林保全に関する講演会
- 2015年11月7日(日)松葉カキ活動予定が雨天順延

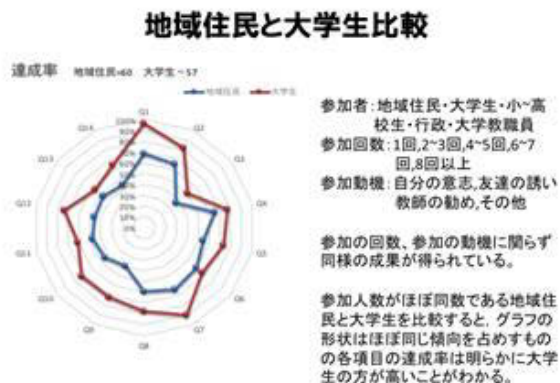
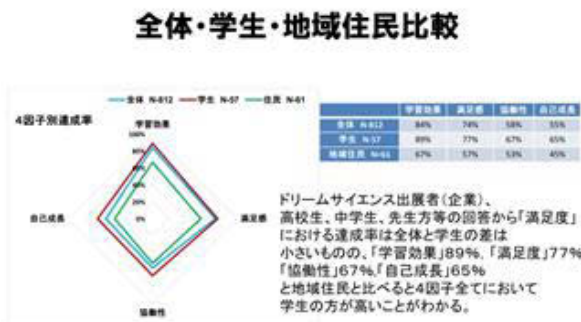
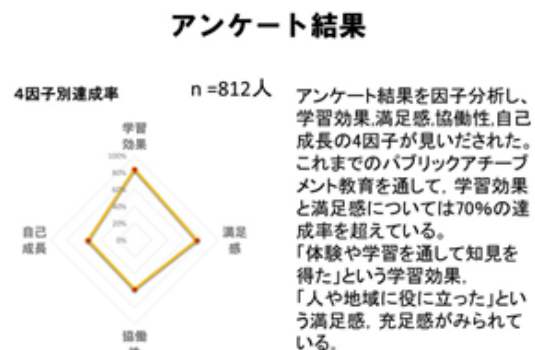
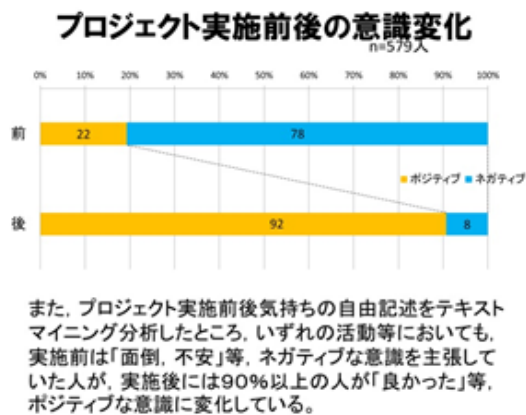
■折戸潮彩公園整備・ワークショップ活動

- 2015年6月6日(土) 芝生植え活動
- 2015年9月7日(月) 第11回ワークショップ開催
- 2015年12月3日(木) 第12回ワークショップ開催

■ドリームサイエンス2015

清水区を拠点として行政や大学、企業や地域住民など子どもを取り巻く様々な立場の人々の連携によって、科学体験、もの作り体験を通して、次世代を担う子供たちの健全育成に寄与することを目的に開催し、65ブース、3850名の参加があった。
 2015年4月から毎月1回 ドリームサイエンス2015 in Shimizu 実行委員会
 2015年9月19日(土)ドリームサイエンス2015 in Shimizu 開催
 上記地域に根差したプロジェクト活動や松林保全のための正しい知識を得る講座や実践活動の参加者対象に意識調査を行った。
 調査票は、先行研究から援助成果に関する設問、ボランティア活動動機に関する設問を選択式回答とし、活動前後の意識、気持ち、参加した感想等を記述回答する形式としている。
 調査票配布に加え、QRコードを使用したWeb調査形式をとっている。

テキストマイニング等を含む意識変化の分析を行った。調査結果の抜粋を以下に示す。



アンケート調査を因子分析し、学習効果、満足度、協働性、自己成長の4因子が抽出された。これまでのパブリック・アチーブメント教育を通じて、学習効果84%と満足度74%を示し、体験や学習を通し

で知見を得たという学習効果、人や地域に役立ったという満足感、充足感がみられている。

自己成長 55%、協働性 58%という結果は、ドリームサイエンス参加者の回答者が多く結果に反映されている結果である。

また、プロジェクト前後の気持ちの自由記述においても、実施前は「面倒、不安」等、ネガティブな意見が 78%、ポジティブな意見 22%であり、実施後は「良かった」等ポジティブな意見が 92%、ネガティブな意見が 8%と大きく気持ちの変化がみられる。

折戸潮彩公園整備ワークショップ、東静岡駅周辺景観まちづくり等の専門性に結び付くパブリック・アチーブメント教育プログラムにより、ジョブ・トレーニングにも結び付き自己成長、協働性が高い。特に折戸潮彩公園整備ワークショップ参加学生は、志望する就職に繋がったことも申し添えたい。

「学習効果」「満足度」「協働性」「自己成長」の全ての項目において地元住民より学生の評価が高く、学生を対象にしたパブリック・アチーブメント教育プログラムは効果的であることがわかった。

まとめとして、地域課題を通じた協働参画型によるパブリック・アチーブメント教育は、学生はもとより、参画者の地域社会の中での自分の存在価値の認識や地域や世界の問題とのつながりを発見する機会となる。実践型学習のアプローチの可能性は、ポリティカルリテラシーを育み主体的な市民の育成に結び付くと考える。

17) 交通インフラの変革に対応した地域観光資源の活用

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：田中伸彦（観光学部観光学科）

共同取組者：菅井克行、本田量久、遠藤晃弘（観光学部観光学科）

取組の概要

圏央道が、茨城県境古河から神奈川県茅ヶ崎まで開通した。それに伴い、車による首都圏の観光導線が大幅に書き換えられた。

神奈川県平塚市・大磯町は、圏央道の西側に隣接する。そのため、域内への入込観光者が大きく変動することが想定される一方で、圏央道は反対方向（東側）に延伸するため、観光資源を適切に活用した計画を樹立しないと素通りされる可能性もある。

本課題では To-Collabo で上記市町と取り組んできた既存研究・実践の成果等をベースに、交通インフラの変革に対応した地域観光資源の活用法を考察する。

具体的には、平塚市では、観光客の動線を市内南部から北西部の里山地域まで繋げる方策についての検討を行う。大磯町では、北関東圏のマーケットに対し、海をテーマにアピール展開する方策を検討する。

取組の成果

平塚市内の国道 134 号線沿線にハブ(立寄拠点)をつくり、圏央道からの観光客の動線誘導を検討している。また、観光動線を圏央道から平塚市北西部の里山地域まで繋げるため「吉沢八景選定プロジェクト」を推進し、里山散策と展望を核としたデスティネーションづくりを進めた。

また大磯町では、北関東圏のマーケットを対象に、海をテーマにアピール展開する方策を検討した。具体的には、車両来訪実績や所要時間など、数十項目の来訪データを取得・分析した。その結果、圏央道経由で 1 時間以上かけて来訪する観光客が多く確認できることが明らかにされた。

神奈川県は、ブランドイメージは高いものの、観光デスティネーションイメージの形成という点では最も統一感に欠ける都道府県の 1 つである。その中でも、西湘地域は観光旅行の狭間と見なされ、デステ

イネーション化が進んでいない。

本課題を通じて、圏央道のお陰で観光入込の増加が期待される平塚市、大磯町に対して、東海大学が「地（知）の拠点」として振る舞うことで、観光まちづくりの側面から長期的展望に立って、社会貢献できるエビデンスや地域活用法を地域に即した形で構築し、寄与できたと考えている。

また、この取組へ東海大学の学部生・大学院生に参加してもらったことにより、観光資源計画と交通計画という観光上重要な2つの施策の融合に関し、現場を通じた職能が育まれると考えられる。そのため、地域志向教育の場として本課題は有効な役割を果たすと考えられる。

更に、本課題の取組プロセスには一定の汎用性があると考えている。つまり日本国内においては、今後も高速自動車道や鉄道などの交通インフラの新規開業や路線変更が予定されているため、他地域で「交通インフラの変革に対応した地域観光資源の活用」に関わる地域志向教育や観光まちづくりを行う際のプロトタイプとして活用できると判断している。

18) 神奈川県絶滅危惧種シウリザクラの衰退調査と保全対策の検討

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：谷晋（総合教育センター）

共同取組者：竹中万紀子（生物学部生物学科）、伴野英雄（桜美林大学自然科学系）

取組の概要

シウリザクラ *Padus ssiiori* は本州中部以北の山岳地帯から北海道に分布するサクラの一種である。神奈川県が分布南限で、清川村の丹沢山と相模原市の蛭ヶ岳の標高1,000m以上の森林に小集団でパッチ上に分布している。総個体数は約400個体と少なく、近い将来に絶滅の可能性が高いとして神奈川県の絶滅危惧種IBに指定されている。シウリザクラの葉を摂食するサクラスガ *Yponomeuta evonymella* 幼虫の大量発生が1996年以降頻発してきたため、食害のストレスにより枯死するシウリザクラが急増している。丹沢山地でのサクラスガ幼虫の食餌はシウリザクラだけであり、サクラスガもまた絶滅が危惧される種となるため、両種の共存を可能とする保全対策が必要である。

本研究ではシウリザクラとサクラスガの生育状況と食害のモニタリング調査を行い、上高地、日光、北海道などの他産地と比較検討する。また、サクラスガ発生量を抑制する働きがある寄生性昆虫や鳥などの捕食者について調べる。保全対策として、根萌芽（ひこばえ）をシカの食害から守り、世代更新を促す植生保護柵について、柵内の幼稚樹の生育状況からその有効性を引き続き検討する。新たな試みとして、神奈川県自然環境保全センターと共同で、幹への薬剤の注入試験を行い、サクラスガ幼虫の発生量抑制の効果を検証する。

取組の成果

- ・モニタリング 丹沢山堂平で継続して調査している10個体のシウリザクラの網巢数は397巣で、昨年の大量発生のレベルから大幅に減少し、全失葉をともなう著しい食害は確認されなかった(図1)。しかしながら、上高地や日光での密度は10個体当たり1巣未満で、これらと比較すると、丹沢山では今年も桁違いに高い網巢密度が維持されていた。北海道の野幌では丹沢山並みの高い網巢密度で、顕著な食害も発生した。さらに9月の調査で高密度の産卵も確認されたため、越冬幼虫の生存率の調査を追加し、2016年1月までに約半数の卵塊が鳥などに捕食されたことを確認した。寄生性昆虫では堂平で新たにヒメバチ類の寄生が確認できた。また、丹沢山のシウリザクラは2015年7月までに7個体の枯死が確認され、丹沢山地の約1/3がこの10年で枯死したことが判明した。
- ・保全対策 丹沢山で設置年代の異なる3カ所の植生保護柵内で、根萌芽由来のシウリザクラの生育状

況を4月に調査した。保護柵設置1年目と5-6年目の2カ所では幼稚樹の成長と個体数の増加が認められたが、保護柵設置後10年以上経過した残りの1カ所では、早春にシカが柵内に侵入して幼稚樹を摂食したため、成長が抑制されていた。また、自然環境保全センターと共同して、堂平において樹幹への薬剤注入試験を行った。4月下旬に20以上のサクラサガ網巣があるシウリザクラ5個体を選び、3個体に薬液を、残りの2個体には対照として水を注入した。6月に確認したところ、薬液を注入したシウリザクラ個体には巣は全く無かったが、対照の個体にはそれぞれ23、47巣が認められ、薬剤の有効性が確かめられた。

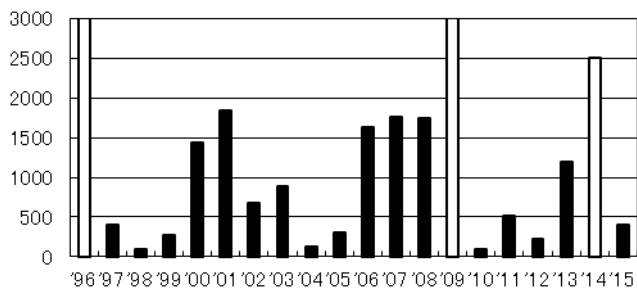


図1 堂平におけるシウリザクラ10個体当たりのサクラサガ網巣数の年次変化（1996-2015年）
白抜きは正確な計数が不可能なほど網巣が多かったため、最低の見積もり数

19) コムクドリの生態と渡りを解明し保全を考える —地域と大学の協働活動として—

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：竹中万紀子(生物学部生物学科)

共同取組者：竹中踐、河合久仁子(生物学部生物学科)

取組の概要

札幌市南区におけるコムクドリの繁殖生態を調査し、健全な状態で繁殖できているのか明らかにした。個体に足環をつけて個体識別し、特定の個体の移動や繁殖場所を明らかにした。小型GPSといった装置を装着して放鳥した。越冬場所の解明につながる基本的な調査は上首尾に進めることができた。本年度は小学校校庭に巣箱を3個設置し、小学生に子育ての様子を観察してもらい、コムクドリが東南アジアと札幌の間を大旅行していることや、繁殖地と越冬地の両方の環境が種の存続に必要なものであることの理解につながった。

2015年12月26日には、小学生向けに南区藻岩地区センターとの共催で、「身近な生き物を知ろう」というシンポジウムを開催した。地域の5つの小学校から23名の参加があり、前半は南区の身近な生き物の紹介を代表教員および共同活動者2名がパワーポイントで紹介し、後半は大学の実習で実際に使っているのと同じ実体顕微鏡で、昆虫、植物、鳥の羽などを観察しスケッチする経験を通して、学ぶというものである。

取組の成果

コムクドリの巣箱設置と繁殖の様子をモニタリングすることは、自然の学ぶ機会として優れているために、南沢小学校からは今後も継続的小学校敷地内に巣箱を設置して、小学生が見えるような仕掛けで協力してほしいという要望がある。東海大学と小学校の間を、同じ個体が行き来していることも確かめられているので、人の連携だけでなく、野鳥も交流していることが、つながりを意識する材料となった。

また、シンポジウムでは、東海大学生物学部の学生が中心となって小学生の顕微鏡観察を手伝ったり、参加者の親御さんとも一緒に感動を共有したりできたことは、大きな成果だと考えられた。

3) 大学推進プロジェクトの設置

今年度より、To-Collabo プログラムの中で申請時から取り組んでいる4計画8事業について、2013～2014年度の地域志向教育研究経費採択課題の取組テーマと取組メンバーをベースに、関連領域のテーマやメンバーをマッチングさせることで、教員個別の取組から大学が推進するプロジェクトとして、新たに『大学推進プロジェクト』を設け、下記の5事業を推進した。

なお、現在設けていない3事業（ブランド創造事業、スポーツ健康事業、動植物保護事業）については、今年度までの成果を元に次年度にプロジェクト化、推進していく。

[参考：2015年度大学推進プロジェクト一覧]

関連事業		代表者氏名	代表者所属
地域デザイン	安心安全	内田 理	情報理工学部情報科学科
ライフステージ・プロデュース	大学開放	池村 明生	教養学部芸術学科
観光イノベーション	地域観光	松本 亮三	観光学部観光学科
観光イノベーション	文化・芸術	篠原 聡	課程資格教育センター
エコ・コンシャス	エネルギー・ハーベスト	福田 紘大	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻

以下、5件の課題の2015年度成果報告である。

1) 大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 安心安全事業」

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：内田理（情報理工学部情報科学科）

共同取組者：杉山太宏、山本吉道、梶田佳孝（工学部土木工学科）、山本義郎（理学部数学科）、富田誠（教養学部芸術学科デザイン学課程）、崔一英、田島祥（チャレンジセンター）、広川美津雄（教育研究所）、成川忠之（総合教育センター）、福崎稔（高輪教養教育センター）、小島善和（健康科学部看護学科）、長尾年恭（海洋研究所）、村上祐治（基盤工学部電気電子情報工学科）、宇津圭祐（情報通信学部通信ネットワーク工学科）

取組の概要

地震、豪雨、豪雪、津波等の大規模な自然災害が避けられない我が国では、発災前、発災時、発災後の時系列を考慮した対応策を平時から入念に準備することが必須である。例えば発災後の被害を最小限に抑えるためには、避難計画や情報収集・伝達手段、救援・救護体制に関する事前検討が極めて重要となる。

本取組の目的は、多様な災害への対応を自治体や地域住民と連携して確立することである。また、フ

オーラムなどのイベントを実施することにより、これまで各校舎単位で自治体や地元住民との連携により実施されていた学生プロジェクト等の取組みを他校舎・他地域にも紹介し、その普及を図る。大学近隣地域の防災マップづくりなど地元住民と連携して実践する活動には学生を積極的・主体的に関与させ、パブリック・アチーブメント型教育の一環として推進する。

取組の成果

大学近隣地域の安心安全社会実現という目的に向け、様々なイベント開催や地域連携活動を実施した。今年度の主な取組は以下のとおりである。

- ・「秦野市防災フォーラム～市民で考える防災・減災～」を2015年6月13日に開催した（湘南）。
- ・「災害外傷予防教室」を2015年7月4日、8月17日、8月29日に開催した（伊勢原）。
- ・「高輪まつり 2015～防災・減災を考える交流会～」を2015年11月22日に開催した（高輪）。
- ・「親子で楽しむ防災広場 in 湘南」を2015年12月13日に開催した（湘南）。
- ・「東海大学災害救援ボランティア講習会」2016年2月22日、23日に開催した（湘南）。
- ・秦野市大根地区の防災マップ作成に土木工学科の学生・教員が協力した。
- ・土石流を予知するための観測システムを開発し、ワイヤレス・アイデア・コンテストのアイデア賞を受賞した。
- ・大磯町を対象とした津波浸水シミュレーションの研究を推進した。
- ・“災害時の自助・共助について考える”をテーマにした授業を実施した（「挑み力（演習B）」）。
- ・高輪校舎で学生主体の「地域安心ネットワークプロジェクト」の活動を始動した。
- ・Twitterを用いた災害情報共有システムを開発し、2015年8月30日のビッグレスキューかながわにて試行した。また、2016年1月27日の平塚市帰宅困難者対策訓練で利用された。
- ・秦野市大根地区自治会から依頼された自転車盗難防止のポスターとチラシを作成した。
- ・防災科学技術研究所が主催する「第6回防災コンテスト・e防災マップ部門」に参加した。



秦野市防災フォーラムの様子



親子で楽しむ防災広場 in 湘南の様子

2) 大学推進プロジェクト「ライフ・プロデュース計画 大学開放事業」

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：池村明生（教養学部芸術学科デザイン学課程）

共同取組者：伊藤明彦（国際文化学部デザイン文化学科）、阿部正喜（経営学部観光ビジネス学科）

他、上記関係学科教職員

取組の概要

札幌・湘南・熊本校舎の芸術文化にかかわる知・人・力を結集し、各地域の特性や校舎の固有な資源を活かしながら、地域の知の拠点となる大学の将来像を試行。取組みでは多世代の市民を巻き込み、少子高齢化におけるコミュニティの形成に寄与しながら、学生たちのパブリック・アチーブメント型教育の実践にもつなげることを目的とする。

【Sapporo サテライトキャンパス】：デザイン文化にかかわる公開プログラムを開催

学識者・教職員・学生・市民が一堂に会す場において、社会基盤のイノベーションの可能性を探求。「札幌デザインウィーク」ブース出展、「スローライフ・スローデザイン・働き方の未来」セミナー、「こどものための脳みそ遊び場」映像ワークショップの開催



【Shonan オープンキャンパス】：芸術文化にかかわる体験型プログラムや公開講座を開催

1) 「TOKAI おひろめ芸術祭」

芸術学科の教職員・学生 130 名が 16 プログラムを準備し、のべ 666 名の市民に対して芸術に親しむ機会を提供。



2) 「芸術シニアアカデミー」

湘南校舎周辺の 50 歳以上のシニア層を対象に音楽・美術・デザイン講座を開催し、のべ 21 名に専門的な芸術教育を提供。



【Kumamoto ミュージアムキャンパス】：大学の文化資源を活かしたエキジビションを開催

1) 三宅純男「世界の昆虫」コレクション展

大学が保有管理する昆虫標本を材料に、教職員・学生・地元美術館スタッフが協力し合い、来場者 1960 名の展覧会を実現。



取組の成果

各キャンパスの取組みを集約するとともに、共通課題である多世代交流を促進する目的において一定の成果をあげた。特に本事業は、デザイン・芸術・大学資源を活かした取組みであり、実質的なかたちで市民に満足を与える機会となり、少子高齢化における豊かなコミュニティの形成に寄与するという課題に対して、大学の知の一つである芸術文化資源は、多様な人々を惹きつける魅力があると判断できた。一方、学生たちのパブリック・アチーブメント型教育の実践として取組んだ本事業は、学生たちの参加という側面において成果をあげたが、地域課題に学生たちが自主的に取り組むという意味ではまだ不十分である。いずれにしても、各校舎周辺地域の多世代交流を促す本事業は、大学または校舎全体の取組みとしても今後発展し得る可能性を秘めている。

3) 大学推進プロジェクト「観光イノベーション計画 地域観光事業」

「広域連携による観光・地域活性化の推進事業」

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代表者：松本亮三（観光学部観光学科）

共同取組者：泉正史、屋代雅充、岩橋伸行（観光学部観光学科）、宮内順、鈴木康夫（経営学部観光ビジネス学科）、植田俊、島崎百恵、中西健一郎、塚本未来、服部正明（国際文化学部地域創造学科）、ハミルトン・マーク、杉浦理恵、平木隆之（国際文化学部国際コミュニケーション学科）、中尾紀行、藤森修、田川正毅（国際文化学部デザイン文化学科）、藤田玲子（外国語教育センター第一類）

取組の概要

わが国の政治・社会・経済機能が東京へと一極集中してきたことに伴い、現在、地方の市区町村の存立が危ぶまれている。この危機的状況を救うためには、人々が地域内で職を得て、子育てをし、その後の世代も安心して暮らすことのできる、経済的に自立した地域社会を作ることが必要である。地方創生の一助として期待されるのが、観光による地域振興である。しかし、観光振興は、利害関係をもつ地域内の諸団体や、行政単位に縛られた市区町村だけではなしがたい。これらの団体や行政単位をつなぐのが、大学の重要な役割だと考えられる。

湘南・代々木校舎の観光学部は、湘南校舎近傍の市町村・観光協会と、熊本校舎の経営学部は、南阿蘇地域の町村と、札幌校舎の国際文化学部は、札幌市南区の諸地域並びにその構成諸団体と連携しつつ、それぞれの地域特有の観光資源を生かした地域活性化を推進する諸活動を行うこととした。この試みは、2014年度以来継続してきたが、本年度は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催決定を契機に増加してきた外国人観光客に対する効果的な接遇と、観光資源の発掘・開発をめざして、その理論的展望と具体的ノウハウを共有できるデータベースの構築、さらには、全国各地での応用的展開の可能性を探ることを目的としている。

取組の成果

本プロジェクトでは、各校舎が立地する地域の特性に応じて、各校舎独自のプログラムを策定し、その方法の有効性や結果の分析を、Eメールの交換とTV会議の開催を通して本事業全体で行い、12月20日には代々木校舎で全体シンポジウムを実施した（報告書は3月末刊行予定である）。各校舎の取組みの成果は、以下の通りである。

1) 湘南・代々木校舎：丹沢湘南地域において広域観光連携によるインバウンド観光の可能性を探るため、観光学部の学生が主体となって秦野市、平塚市、伊勢原市、厚木市を巡る外国人向けの広域観光バスツアーを企画・実施した。丹沢湘南観光連携会議メンバーの協力を得ながら学生による調査および企画検討とともに、バスツアーのガイドも学生に担わせた。これにより、丹沢湘南地域における外国人向けツアーの方向性が明確化されるとともに、学生のためのきわめて有益な実践的な教育の機会となった。

2) 熊本校舎：旅行会社、宿泊施設、観光施設並びに、行政機関、旅行会社、農業、商工業、金融業などDMOの形成に関係の深い関係者を対象に、インバウンド観光の現状と課題についてインタビュー調査を行った。インタビュー時の意見交換や調査結果のフィードバックを通じて、外国人旅行者を受入れる上で、DMOが重要な役割を果たすことの共通認識を得ることができた。調査では、Wi-Fiの設置や言語対応、人材の確保など多くの問題点が指摘されており、これらの課題については、今後関係者間で解決策を考案することになっている。

3) 札幌校舎：3つのプロジェクトを実施した。①札幌軟石未来PJでは、教員の指導のもとに学生が軟石の作品を作り、「札幌手作りフェスティバル」等に出品するとともに、軟石作品作りワークショップも開催し、札幌南区の観光客用グッズの試作を行った。②“南区暮らし”活性化プロジェクトは、言語を超えたピクトグラムを利用して、商店街のマップを作成する試みであり、デザイン会社の指導のもと、附属四高と本学大学生の協働のもとに進めており、2月末にアイコンとマップが一体となった「藻南商店街グローバルマップ（仮称）」が完成する予定である。③札幌スマートフォン・フォトラリーPJは、本学学生とスウェーデンからの留学生がチームを作って南区の魅力を発見するフォトラリーを行い、既存の名所と共に新たな名所の発見を行うもので、その成果は、①の活動成果も取り入れ、「南区ロゲイニングマップ（仮称）」として取りまとめる予定である。

4) 大学推進プロジェクト「観光イノベーション計画 文化芸術事業」

「博物館プロジェクト」

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：篠原聰（課程資格教育センター）

共同取組者：山花京子（文学部アジア文明学科）

取組の概要

大学には教育研究のなかで収集・蓄積された学術資料や博物館資料がある。それを広く一般に公開し、大学が知の拠点として社会に貢献するプラットフォームづくりを目的としたプロジェクト。湘南校舎の松前記念館（博物館相当施設）を中心に大学コレクションを活用したハンズ・オン（触る体験型）展示や ICT の活用、普及イベントを通じて、「大学博物館発、知/地の拠点としての新たな地域連携」のあり方を探求し、実践する試みである。プロジェクトの実践については学生の関与を前提としており、市民起点の文化創造や地域社会における共生実現の学びの場として、学生が利用者の視点から「大学博物館の扉」をひらく役割を担うことを期待している。

取組の成果

普及イベントとして大学所蔵の屋外彫刻を活用した①「彫刻を触る☆体験ツアー [7/26]」、②地域連携イベント（特別レクチャー）「触文化の可能性とユニバーサル・ミュージアム [8/23]」、③公開シンポジウム「ミュージアムのトリセツ [10/17]」、④建学祭ミニコンサートを開催した（①③④は大学 HP ニュース掲載）。ハンズ・オン（触る体験型展示）、ICT 活用の活動としては、情報端末（iPad）を用いて館所蔵の FM 東海音源や映像資料を公開した他、⑥触る展示コーナーでも館資料を活用した展示更新を実施し、資料の劣化と保存の観点から、⑦ミュージアム IPM メンテナンスも一部導入した。また⑧古代エジプト資料の一部を公開し、フォト3D撮影用ターンテーブルを用いた資料の3D撮影を試験的に実施した。①では屋外彫刻の石膏原型の存在が明らかになり調査の結果、美術史的価値が高いことが判明した。今後は学生や地域住民を巻き込んだ参加型「公開修復」での活用が見込まれる。②③④は市民ボランティア団体、近隣の学校や博物館関係者との交流の機会となり、今後の地域展開の際のスムーズな連携が期待できる。⑤⑥⑦⑧では、大学コレクションの保存と公開という使命のみならず、展示コンテンツの一部をモバイル用にパッケージ化して、それを地域に展開するアウトリーチなどの成果が期待できる。⑧に関連し、3D 写真の試験版を作成した他、ユニークプロジェクト ICPP との連携ワークショップとして「体験！古代エジプト [7/11]」も実施した。ミュージアム・コミュニケーター（ユニークプロジェクト）や博物館実習生等の参画状況から、学生の教育面での成果も見込まれる。



新発見の石膏原型

普及イベント

彫刻メンテナンス

5) 大学推進プロジェクト「エコ・コンシャス計画 エネルギー・ハーベスト事業」

「省エネ・創エネを意識した街づくり ～スマートシティーへの第一歩～」

代表者（所属）、共同取組者（所属）

代 表 者：福田紘大（工学部航空宇宙工学科航空宇宙学専攻）

共同取組者：長谷川真也、高橋俊（工学部動力機械工学科）、田中博通（海洋学部環境社会学科）、清田英夫（基盤工学部電気電子情報工学科）

取組の概要

2011年の震災以降、再生可能エネルギーへの注目や期待が以前にも増して高まっており、スマートシティーと呼ばれる分散型電源システムを利用した街づくりなどについても、議論が活発化している。すでに、大手企業や自治体がプロジェクトとして進めている事例も見受けられるが、実際に住民が再生可能エネルギーやスマートシティーに関することをどれだけ理解しているのかと問われれば、まだまだ浸透しているとは言い難い。一方で、東海大学では、近年、多くの新しい再生可能エネルギー技術の研究・開発が進められている。

本プロジェクトは、本学のエネルギー関係の研究成果を広く公開することにより、地域住民の方々に、再生可能エネルギーが、これまでどのような発展をしてきているのか、現在、どのような最先端テクノロジーが存在するのかについて知って頂き、エネルギーについて自分たちで考え、議論する機会を作り、将来自分たちの暮らす地域のエネルギー供給についてもどうすべきか考える一助となることを目的としてイベントの実施、展示を行った。また、学生が地域のエネルギー問題の解決策を地域住民と一緒に考える場を設けることで、本学が進めるパブリック・アチーブメント型教育の一環として位置づけ活動を行った。

取組の成果

1. シンポジウム「省エネ・創エネを意識した街づくり ～考えよう私たちのエネルギー～」の開催（湘南校舎）

専門家による基調講演や専門家と本学学生による公開討論、熱音響機関の公開実験を通して、再生可能エネルギーや新エネルギーについて一般の方に理解を深めてもらうとともに、そのような技術を日常生活にどのように取り入れることが可能か、エネルギーの将来をどのように考えるべきかについて考えるきっかけを創出することを目的としてシンポジウムを開催した。一般参加者のみならず参加学生からも活発な意見・質問が出された。



2. 「湘南ひらつかテクノフェア」でのソーラーカーおよび熱音響システムの展示

ソーラーカー、熱音響システムの展示・公開実験を行い、再生可能エネルギーや新エネルギーについて、紹介、説明を行った。



3. 平塚市立みずほ小学校4年生を対象にした「エコエネ環境教室」の開催（湘南校舎）

小学生60名を対象にソーラーカー・電気自動車のデモ走行、熱音響機関の公開実験を行った後、ソーラーカーと熱音響機関についての講義を行った。

4. 中学校・高等学校の生徒を対象とした体験授業と実験の実施（清水校舎）

芝中学校・芝高等学校の生徒40名を対象に海洋エネルギーの国内外の開発状況と清水キャンパスで研究開発を行っている「越波式波力発電」の原理の説明、実験が行われた。

5. 自由民主党静岡県支部連合会青年部・青年局主催による公募提案型政策コンテストへの参加（清水校舎）

自由民主党静岡県支部連合会青年部が地域社会の①人口減少、②産業振興、③自然環境とエネルギーの将来に向けた政策を公募したものに対し清水校舎の学生が2件の応募を行った。2件とも最終審査の公開プレゼンテーションに臨み、そのうちの一件、「身近な木質資源をエネルギー利用したエコ社会の創出」が厳正なる審査の結果、見事入賞した。



4) To-Collabo プログラム地域志向教育研究報告会の開催

2015年12月5日(土)、清水校舎において「2015年度 東海大学 To-Collabo プログラム 地域志向教育研究報告会」を開催した。本事業の今年度中間期における成果を学内外に発信し、活動のさらなる拡充と深化につなげることを企図した。本報告会には、2015年度地域志向教育研究経費に採択された取組みの代表者や本学教職員に加えて、本事業における連携先である行政・団体の関係者や市民ら約150名が参加した。



本報告会の第1部では、田辺信宏静岡市長と山田清志学長が対談。これまで30年以上にわたって連携を深めてきた成果を紹介しつつ、全国の政令指定都市の中で健康寿命が長い静岡市の特徴や、港湾施設のみならず砂浜など海に関するさまざまな機能が整っている清水区の利点を生かす形で、連携を深めていく方策について意見を交換した。続いて行われたパネルディスカッション「地域活性化のために地域と大学ができること」では、海洋学部の千賀康弘学部長、海洋学部環境社会学科の東恵子教授、海洋文明学科の山田吉彦教授、海洋フロンティア教育センターの岡田夕佳准教授、静岡市清水区三保地区連合自治会の櫻田芳宏会長のほか、東教授の指導のもと活動に取り組む学生3名が登壇。海洋研究所の長尾年恭教授のコーディネートのもと、海洋学部で推進している「地域連携を通じた包括的環境アウェアネス・プログラム」の報告の後、折戸地区の活性化に向けて地域住民と学生が行っている取組みをはじめ、既存の産業や港湾施設を有機的に連携させることで総合海洋都市・清水を創造する「海街」構想、主要な土産物の一つであるサクラエビの振興策を漁業関係者や行政と学生が協力しながら進めているプロジェクトの活動成果と学生への教育効果などについて発表が行われた。



第2部では、3会場に分かれて、全国の各校舎の教員が連携しながら行っている全24件の取組みについて各取組代表者により活動概要と成果、今後の展開などについて報告がなされ、参加者との間でより良い活動を展開するための工夫などが議論された。

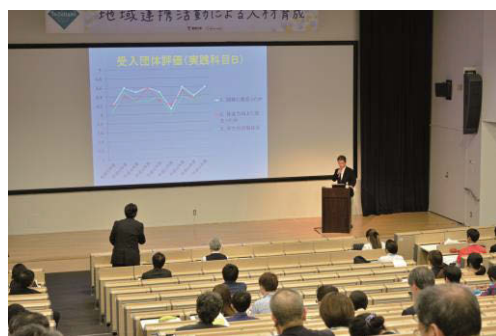
第2部では、3会場に分かれて、全国の各校舎の教員が連携しながら行っている全24件の取組みについて各取組代表者により活動概要と成果、今後の展開などについて報告がなされ、参加者との間でより良い活動を展開するための工夫などが議論された。

5) To-Collabo プログラムシンポジウムの開催

COC 事業採択から 3 年目の中間の総括として、地域と連携した人材育成について改めて東海大学としての方向性を探ること、また、本事業の活動を通じた教育研究について、地域住民や学生、教職員がともに考える機会とすることを目的に開催した。

2015 年 10 月 24 日（土）、高輪校舎において「2015 年度 東海大学 To-Collabo プログラム シンポジウム『地域連携活動による人材育成』」を開催した。本学教職員・学生、学外教員、地域住民ら約 100 名が参加した。

第 1 部「つくば市をキャンパスとした学びから～社会力豊かな人間の育成を目指して～」と題した基調講演では、筑波学院大学が実践している「オフ・キャンパス・プログラム～つくば市をキャンパスに～」において、学生が社会参加活動を通して社会力を育成する体験学習プログラムを運営し、大学と地域との橋渡し役となる社会力コーディネーターを務める武田直樹氏を迎えご講演をいただいた。社会人に必要な力の育成について、豊富な事例をもとに語られた。



第 2 部では、地域活動に取り組んできた本学及び他大学の学生が会し、活動の目的・概要・成果・学び・意識・工夫等について発表、ディスカッションしてもらうことを目的に「私たちの学びとこれから」と題したパネルディスカッションを行った。東海大学「地域カフェ研究会『Three Café』」、名古屋学院大学「まちづくりカフェ『マイルポスト』」、東海大学「地域安心ネットワークプロジェクト」、芝浦工業大学「ロボット技術による見守り健康支援等スマートタウン構築プロジェクト」、東海大学「Takanawa 共育プロジェクト」それぞれに携わる学生が登壇し、日々の活動の内容や、活動を通して得られた成果や学び・気づきについて紹介し、活発なディスカッションが行われた。その中で、地域カフェ研究会の村井健太郎さん（国際文化学部 4 年）は、「地域に根ざした活動を展開する中で、“若者会” が結成されるなど成果が出てきている」と語り、地域安心ネットワークプロジェクトの眞中絢美さん（大学院情報通信学研究科 1 年）は、「誰でも安心して使えるネットワーク構築と高齢者でも扱えるアプリケーション開発を目指す」と今後の展望を語った。



↑ Takanawa 共育プロジェクト
菅野真優花さん（情報通信学部 3 年）

質疑応答では、会場となった高輪地域の住民や、本学学生から質問がなされ、活発に意見が交わされた。会場との熱心な質疑応答を受け、大学運営本部の内田晴久本部長は、「今回のシンポジウムで語られたさまざまな地域貢献活動の成果を参考に、大学の役割についてさらに考えていく必要がある」とまとめた。本シンポジウムを通し、学生が課題発見、課題解決を図るための力をどのように醸成していくべきかを伺い知ることができた。

6) To-Collabo 市民セミナーの開催

地域の人々や今後シティズンシップを獲得していく学生たちに、自分たちの生活や住んでいる地域について考えてもらう機会として、チャレンジセンターと合同で次のセミナーを開催した。

7月3日に第14回チャレンジセンターセミナー・To-Collabo 市民セミナーを、湘南校舎8号館で開催した。

当日は、東日本大震災の避難所で長期にわたりボランティア活動に携わっている映画監督の小川光一氏を講師に招き、小川氏が被災地で撮影したドキュメンタリー映画の上映と、「“その時”あなたは大切な人を守れますか」と題した講演を実施し、高輪・代々木・清水・熊本・阿蘇の5校舎とテレビ会議システムでつなぎ、学生や教職員、地域住民など約300名が聴講した。



はじめに、チャレンジセンターの崔一英次長が「国内外でボランティア活動を展開している小川光一監督の生き方を、ぜひ今後の活動や人生の糧にしてください」と挨拶。続いて、小川氏が監督・撮影した映画『あの街に桜が咲けば』を上映した。これは、岩手県陸前高田市で、東日本大震災の際に津波が到達した地点に1万7千本の桜を植える活動を続ける、「NPO法人桜ライン311」の取組を紹介した映画である。小川氏は「悲しみを繰り返さないために何ができるのか、自問自答しながら植樹を続ける人々に共感した」と映画制作の理由を説明した。「被災地で奮闘する人々の姿を通して、自分の住む街や家族についてあらためて考えてほしい」と語った。

また、語学力を高めるために出かけた海外での体験についても語り、スペインのホームレス青年やインドネシアのスラム街の若者との出会いから、「悲惨な状況にある人々を、見て見ぬふりはできないと考えた」とボランティアを始めた経緯を紹介。さらに、日本が世界第4位の多雨国で、同第2位の火山保有国であることなどをクイズ形式で説明したほか、街頭インタビューで見えてきた「日本人の防災意識の低さ」について解説した。「災害は他人事ではない。自分の大切な人を守るために、“いざ”というときに何ができるのかを、日ごろから考えて準備しておくことが大切です」と力説した。



聴講した学生たちは、「『他人の痛みをどこまでも想像できる人間であれ』という言葉に感銘を受けました」「甚大な災害に遭遇したときにパニックにならないよう、防災に関する知識を深めたい」などとコメント。また、参加した地域住民は、「震災の被害を風化させず、教訓として残すことの大切さに気づきました。小川さんの話を家族と共有し、防災対策について話し合おうと思います」と感想を述べた。

7) 学生による社会貢献活動

チャレンジセンターは、学生主体で企画・立案した、ものづくり・国際交流・環境および動物保護などの多様なプロジェクト活動での体験を通じて、本学が育成する力「自ら考える力、集い力、挑み力、成し遂げ力」を体得し、社会に必要とされる人材育成を目的に 2006 年に開設された。10 年目の節目を迎えた 2015 年度は、49 のプロジェクトが採択を受け、約 2000 名の学生が各校舎周辺を対象に多様な地域貢献活動を行った。

(1) 『キャンパスストリートプロジェクト』【湘南校舎：平塚市・秦野市】

6 月 30 日～7 月 2 日に、湘南校舎において開催したイベント「TOKAI 音食 WEEK2015」では、地域住民・本学学生・教員の有志によるライブパフォーマンス「音」と湘南校舎近隣の飲食店が出店する「食」のコラボレーション企画を実施し地域交流を図った。今回は、異文化交流をテーマに活動する『Tokai International Communication Club』（プロジェクト：後述する）と協力し 6 月 30 日に、世界中の食事と音楽を集めた「異文化交流 DAY」を初開催した。また 7 月 1、2 日の「地域交流 DAY」には、秦野市観光キャラクター「丹沢はだの三兄弟」とともにその PR ソングを歌う女性 3 人組ユニット「Cannon〜カノン〜」をはじめ秦野市民による演奏が披露された。本イベント期間中、地域住民や本学学生ら約 1400 名が来場した。

10 月 12 日には、東海大学駅前商店会主催により、小田急線東海大学前駅南口の陸橋上花壇において、昨年に引き続き商店会の方々と花の植え替えを行った。当日は、12 名の商店会や秦野市北矢名日の出自自治会の方々と 12 名のプロジェクトメンバーが作業を実施。本プロジェクトが花壇デザインした本学シンボルマーク「T ウェーブ」に合わせ青と白の 2 色を、ナデシコとパンジーで表現した。

11 月 20 日は、メンバー指導のもと秦野市立大根幼稚園において園児 80 名がクリスマスペットボトルライトを制作。これらは同広場において 12 月 1 日～25 日まで実施した「クリスマス U-night」で、学生が設置した 7m のツリーと合わせてライトアップされ地域のクリスマスを盛り上げた。「クリスマス U-night」では、他にも 11 月 30 日にツリーの「点灯式」を初開催。大根自治会連合会長の高橋栄一氏、東海大学駅前商店会協同組合理事長の多田良貴彦氏による開催挨拶の後、本学学生によるパフォーマンスを行った。当日は、地域の方々約 30 名、本学学生約 20 名、プロジェクトメンバー 15 名が参加した。また、12 月 6 日には『サイエンスコミュニケーター』（プロジェクト：後述する）と『環境キャラバン隊』と協力して「クリスマスワークショップ」を開催した。本プロジェクトは軍手でサンタクロースの飾りを施す「オーナメント制作」を、サイエンスコミュニケーターは人工イクラ技術を応用したスノードームを作る「科学実験教室」を、環境キャラバン隊は地球環境を守るヒーローのエコウェーブが活躍する「環境劇」を披露し約 90 名が来場した。その他にも 12 月 19 日に同広場を拠点に大学近隣を一周する「クリスマスナイトウォーク」を初めて実施。“夜の街を歩く機会を設け、街に暗い通りがあることを知ってもらい、大学近隣地域の防災・防犯意識を高める”ことを目的に行った。プロジェクトメンバー 15 名のほか秦野市職員、自治会および近隣住民、学生など 35 名が参加した。



(2) 『スポーツ社会貢献プロジェクト』【湘南校舎：平塚市・秦野市】

スポーツが盛んな本学ならではの地域活動を行う本プロジェクトは、多様な年齢層を対象に健康増進

やスポーツレクリエーションを楽しむイベントを開催した。

5月5日のこどもの日には、秦野市こども健康部こども育成課より依頼を受け、中央運動公園陸上競技場で開催された「秦野市子どもまつり」にて、“スポーツの楽しさを感じてもらい、家族間のコミュニケーションを促進する”ことを目的にスポーツブースを出展した。



5月30日と11月21日に平塚市西部福祉会館より依頼され、平塚市在住の高齢者の方々17名を対象に、4kmの道のりを歩く「ノルディックウォーキング教室」を開催した。その他、同館より依頼された企画として10月11日に親子で楽しむ運動遊びを提供する「第4回にこにこ教室」を実施し、1歳から2歳の幼児27名とその保護者29名が参加した。さらに、12月6日には、60歳以上の卓球経験者を対象に「ステップアップ卓球教室」を初開催し約20名が参加した。

また、10月10、24日には平塚市の大野子どもの家、みなと子どもの家で、同施設を利用する子どもを対象にスポーツのレクチャーを実施。両日で61名の子どもたちが訪れ、身体を動かす楽しさを体験した。

11月21日には、平塚市立金目小学校で同校PTAが主催する「フェスティバル金目小2015」に学生20名が運営スタッフとして初参加した。児童150名、保護者50名がニュースポーツの「スポーツ鬼ごっこ」を楽しんだ。

2016年1月10日に湘南校舎総合体育館で本プロジェクト主催「第8回東海スポーツDAY～新春!!わくわく運動会～」を開催。この企画は、“地域に住む多くの方々とスポーツを通じた交流をする”ことを目的に、毎年対象を変えてイベントを企画しており、今回は湘南校舎近隣に住む小学生を対象に企画を実施し、メンバーの学生と合わせ約70名が赤白組に分かれて全6種目の競技に取組んだ。

(3) 『Tokai International Communication Club』【湘南校舎：秦野市】

秦野市立南公民館において、秦野市在住の母国が日本ではない児童・生徒を対象に、日本語の読み書きのほか、宿題や授業でわからなかった内容を教えるなどの学習支援を行う「にこティー教室」を2015年4月15日～8月6日、2015年9月9日～2016年3月24日までの期間、毎週水・木曜日に実施。3年目を迎えた今年度は計73回実施。ペルーやブラジル、フィリピンなどにつながりのある未就学児童から高校生まで、のべ1000名以上の子どもたちが訪れた。



また、同館にて8月5、6日、20～22日の計5日間、夏休みの宿題を支援する「宿題サポートプロジェクト」を開催した。期間中は毎回10人以上の、ブラジル、ペルー、ボリビアなどにつながりを持つ小学生から高校生が集まり、のべ45名が参加した。

(4) 『DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト』【湘南校舎：平塚市】

“ダンスを通して地域住民や本学学生が交流を図る”ことを目的に活動する本プロジェクトが、2016年1月24日、湘南校舎において、「DAN DAN DANCE & SPORTS 第5回公演」を開催した。“身体表現の楽しさや所属団体、世代、ダンスのジャンルを超えて楽しむ”ため毎年開催しており、本学ダンス部やチアリーディング部、他大



学学生や平塚市などのダンススクールに通う小・中学生らも参加し、13組約250名がパフォーマンスを披露し、約300名が観覧に訪れた。

(5) 『サイエンスコミュニケーター』【湘南校舎：秦野市・伊勢原市】



子どもたちの理科離れが深刻化している現状において、理科の楽しさを体感してもらう科学イベントを行う本プロジェクトは、5月4、5日に伊勢原市立子ども科学館が主催した「伊勢原市立子ども科学館フェスティバル」にブース「箱の中に虹?!～分光器を作ろう～」を出展した。9月12日には同館において、本プロジェクト主催「サイエンスミニフェスティバル」を初開催した。子どもたちに科学反応を間近で楽しんでもらおうと、スライムと人工イクラの技術を応用したスノードームの実験工作教室を実施。子ども

も78名、保護者88名が来場した。

また、10月24日に秦野市立大根小学校で開催された大根地区社会福祉協議会が主催する「第23回大根ふれあい祭り」に出展。児童28名、保護者8名が来場。真空実験や偏光板を使ったブラックウォールの工作、ペットボトルの中で雲を作る実験を行った。

(6) 『ライトパワープロジェクト』【湘南校舎：平塚市・秦野市】

ソーラーカー・電気自動車・人力飛行機などクリーンで軽量の乗り物の製作を通じて社会に貢献する本プロジェクトが、7月8日に秦野市立大根小学校の4年生約110名を対象に光電池と蓄電池について理解を深めてもらうとともに、地球環境保全の重要性を知ってもらうことを目的に「エコカー教室」を湘南校舎において開催。この教室は、本学と秦野市との提携事業の一環として毎年開催しており、今年度で10回目となる。



8月23日に湘南校舎にて、「2015年度ものづくり教室」を開催。“手作り飛行機の工作を通して子どもたちにもものづくりの楽しさを知ってもらう”ことを目的に実施したもので、湘南校舎周辺の秦野市立広畑小学校、秦野市立大根小学校、秦野市立鶴巻小学校、平塚市立みずほ小学校の児童94名が参加した。

また、10月22日～24日までひらつかサン・ライフアリーナで開かれた「湘南ひらつかテクノフェア2015」にブースを出展。この催しは、産学公の連携強化を目的に、業界の枠を越えて交流を図ろうと平塚商工会議所が毎年開催しており、学生たちは、ソーラーカー「2013年型 Tokai Challenger」の展示や、日ごろの活動やチームの理念についてパネル展示したほか、これまでに出場した大会の実績を紹介する動画も上映し、来場者からの質問に答えるなど交流を深めた。

2016年1月15日には、湘南校舎で平塚市立みずほ小学校4年生60名を対象に「エコエネ環境教室」を実施した。本学主催のこの企画は「大学推進プロジェクト『省エネ・創エネを意識した街づくり～スマートシティへの第一歩～』」（研究代表者：プロジェクトアドバイザーである福田紘大工学部准教授）の一環で開催された。

(7) 『病院ボランティアプロジェクト』【湘南校舎：伊勢原市・平塚市・秦野市・大磯町】

本学医学部附属病院を拠点に活動を行っている本プロジェクトは、病院と社会をつなぐフリーペーパー「BRIDGE（ブリッジ）」第3号を11月に発行。各地域の市役所、公民館、図書館などで配布した。

2016年2月20日には、伊勢原校舎において医療セミナー「みんなで向き合う認知症～あなたの大切な人が認知症になったら～」を開催。本学医学部附属大磯病院神経内科の吉井文均教授が講師を務め、当日は地域住民ら約40名が聴講した。



(8) 『3.11 生活復興支援プロジェクト』【湘南校舎：平塚市】

“持続可能な開発のための復興支援”を活動理念に掲げ、岩手県大船渡市や宮城県石巻市での仮設公



民館や図書館の建設をはじめ、地元の子どもたちを対象にした夏のイベントや地元住民の方々との交流会など、さまざまな形で継続して被災地復興を支援している本プロジェクトは、平塚市中央公民館において10月11日～12月6日まで全5回にわたり、同公民館が主催する「市民アカデミー」で“被災地の未来を創る学生のチカラ つなげよう、ぼくらの支援から、みんなの支援へ”をテーマにメンバーと卒業生が講演を行った。本企画は、市民に対して、東日本大震災の被災地への復興支援について考えるきっかけにしようと企画されたもので、各

回とも約20名が受講し、本プロジェクトのこれまでの取組みを紹介した。

また、2016年2月12日には、平塚市役所に落合克宏市長を表敬訪問。プロジェクト結成から約5年間にわたる被災地活動に加え、平塚市の「大門市」や「ひらつな祭」などの催しに参加し、東北地方の物産品販売、被災地の現状を紹介するパネル展示を実施してきたほか、先述した市民アカデミー講演などを協力してきたことから今回の市長表敬訪問が実現された。

(9) 『Takanawa 共育プロジェクト』【高輪校舎：港区】

高輪校舎周辺の地域活性を目的とする本プロジェクトは、地域の祭りなどの催しに積極的に参加した。

5月4、5日には、商店街「メリーロード高輪」主催による「清正公大祭 のれんノ市」において活動を紹介するブースを出展し、150名が来場した。その他、港区において8月下旬に開催された「高輪神社例大祭」「高野山東京別院盆踊り」「泉岳寺大盆踊り大会」「麻布十番納涼まつり」の会場設営や屋台の運営サポートや神輿かつぎに協力した。



また、5月12日、6月23日、7月7日、10月16日、12月14日、2016年1月29日に、校舎周辺の「地域清掃」を高輪警察署と合同で実施した。

7月1日～7日には「七夕イベント」を行った。高輪校舎に設置した笹に学生や地域住民が願いごとを記した短冊170枚を飾った。

11月22日には、地域の商店街と共に「高輪まつり2015～防災・減災を考える交流会～」を初開催した。“緊急時・災害時における地域の意識を高める”ことを目的にしており、災害時に避難所として指定されている同校舎に地域住民490名が来場した。情報理工学部の内田理准教授によるツイッターを活用した災害情報投稿システムについての講演をはじめ、高輪消防署二本榎出張所提供の災害への備えを呼びかけるビデオ上映のほか、地域商店による出店、『サイエンスコミュニケーター』の真空実験ショー、

港区国際交流協会の外国人スタッフによる英語紙芝居、港区立高輪子ども中高生プラザのミニ工作コーナー、本学医学部付属東京病院および港区高輪地区高齢者相談センターの出張健康診断なども行われた。

さらに、12月1日～25日には校舎をクリスマスイルミネーションで飾るとともに、18日には「第5回クリスマスワークショップ」を開催し、地域の親子15名が参加。「LMF HEAD OFFICE & STUDIO」の協力のもと2種類のキャンドルを制作した。併せて本学ジャズサークル「Takanawa Jazz ensemble」による演奏会も行われた。

その他にも、2015年4月～2016年2月の第3日曜日、計11回にわたり、高輪校舎にて硬式テニス部と協力し「テニススクール」を開催した。3年目をむかえる本企画は、高輪地域に住む小学校低学年から60代の方まで、のべ180名以上が参加し、地域で好評なスクールとなっている。

(10) 『熊本地域プロデュースプロジェクト』【熊本校舎：熊本市】

地域の観光資源を発掘し魅力を発信することで地域活性化を行う本プロジェクトは、熊本県御船町水越地区で「ホテル鑑賞ツアー」を開催。里山を知らない街中に住む子どもたちにも魅力ある風景を知ってほしいと、熊本市立帯山小学校と同西原小学校の児童にも参加を呼びかけ、同地区に住む小学生と合わせて43名が参加した。



(11) 『先端技術コミュニティ ACOT』【熊本校舎：熊本市】

太陽光の力を利用したクリーンエネルギーで非常用電源を確保する基盤を作るとともに、熊本校舎の活性化を目的に、3月23日～4月5日まで校内にあるソメイヨシノ約10本を太陽光発電で蓄えた電気を使ってLED投光器で照らす「夜桜ECOライトアップ」を実施した。



6月23日、10月13日には、熊本市立西原小学校4～6年生約30名を対象に「ロボット教室」を本学付属熊本星翔高等学校の生徒と共同開催。本企画は、プログラミング体験を通してロボットに興味を持ってもらうことを目的に行った。

12月12日には同校舎において、『熊本地域プロデュースプロジェクト』と共同でクリスマスシーズンに合わせてものづくり教室「作って楽しいクリスマスパーティー」を開催。サンタクロースをイメージしたキャンドルを手作りするなど地域の小学生とその保護者ら48名が参加した。

(12) 『阿蘇援農コミュニティープロジェクト』【阿蘇校舎：阿蘇郡南阿蘇村】

農家の繁忙期に重なる夏季休暇期間を利用して、農作業のサポートをすることで農家さんの負担を軽減するとともに農業の現状を学びながら地域活性化につなげる援農活動に取り組んでいる。今年度は8件の農家に対し、トマトやアスパラガスの収穫をサポート。9月3日～9日までは、イチゴの定植作業などを支援した。



(13) 『福祉除雪プロジェクト』【札幌校舎：札幌市南区】

札幌校舎周辺の町内会会員の中から自力で除雪が困難な世帯に希望を募り、今年度は39世帯を対象に学生41名が授業の合間や放課後に除雪活動に取り組んでいる。プロジェクトは秋から各戸を訪問して世帯主と面談、除雪が必要な場所についてカルテを作成して冬に備えた。今冬季は2015年12月～2016年2月において23回の除雪を行った。



除雪活動の他にも、2016年1月13日に、札幌市南沢福祉会館で「ITお助けボランティア」を実施した。本企画は、南沢地区町内会連合会からの要請を受け、同会館で開かれている高齢者向け

の「ふれあいサロン」を訪問し、希望する住民の方を対象にパソコン操作のアドバイスを行ったもの。当日はメンバー3名がボランティアとして参加し、ノートパソコンを持参した参加者の横で、基本操作から画像の保存方法などをレクチャーした。

(14) 『ワンダフル・マリニアニマルズ』【清水校舎：静岡市】

本プロジェクトは三保の海岸に漂着したペットボトルなどの廃棄物で手作りした水中生物ロボットを用いて地域イベントに参加した。8月15、16日に、静岡科学館る・く・るで開催された「青少年のための科学の祭典 第19回静岡大会」に出展。約6200名が来場しプロジェクトのブースには約600名が訪れた。これまでに手掛けた魚類・爬虫類に加え、初めて鳥類型ロボットに挑戦。プールの中を縦横無尽に泳ぐ本物そっくりのケープペンギンのロボットを披露した。



8月22日には、静岡中央卸売市場において市場協力会と共催で「市場魚教室」を開催した。同市場で開催されているマグロセリや解体見学に乗じて、本物のようなクロマグロ型ロボットを用いて、抽選で選ばれた60名の児童と保護者に対し、生態解説などを行った。

12月26日には、ユニークプロジェクト『三保活性化プロジェクト』と夢工房と共に、静岡市清水区折戸生涯学習交流館との共催事業として「子どもわくわくランド」を開催した。抽選で地域の児童及び保護者60名を対象に、生きている化石と称される深海ザメのラブカやミツクリザメの水中ロボットを披露し、生態解説を行った。その他にも、冬休みの工作体験として、虫めがね望遠鏡や羽子板絵付けなどの教室を実施した。

8) 地域連携講座の開催

サテライトオフィス地域交流センターにおいて、本学の教員・学生が講師となり、近隣の連携地域である秦野市・伊勢原市・平塚市・大磯町に在住・在勤・在学の方を対象とし、さまざまなジャンルの講座を提供することにより、地域住民への本学の「知」の還元を図る「地域連携講座」を今年度も開催した。

今年度の講座は、昨年度までの「地域志向教育研究経費」に採択された教員による講座や本学への留学生が講師となって異文化の魅力を伝える講座に加え、『認知症サポーター養成講座』など本学学生が講師となって行う講座や平塚市・秦野市職員による『マイナンバー講座』等、全56講座を開講した（開催予定を含む）。なお、2月開催の講座までの全受講者は647名である。

① バーチャルリアリティの世界

講師：高雄元晴（情報理工学部情報科学科教授）

日時：2015年4月8日（水）18：30－20：00 受講者数：4名

概要：バーチャルリアリティの技術の原理と応用について解説がなされ、学生たちが開発したソフトを用いてバーチャルリアリティの世界を実際に体験する試みがなされた。バーチャルリアリティを体験した受講者からは大きな歓声が上がり、貴重な体験ができた等の好評を得た。

② 小さな子どもへの性教育のお話し

講師：小貫大輔（教養学部国際学科教授）

日時：2015年4月20日（月）10：00－11：30 受講者数：10名

概要：3歳から9歳くらいまでの子どもたちに対して、「性」について親（大人）はどのように伝えればよいかを共に考えようとグループワークで意見交換が行われた。家庭において親が性について話す機会をつくり、正しい性の話をすることの重要性について語られ、幼少期の性教育における絵本の活用方法など具体的な提言もなされ、受講者への啓発が試みられた。



③ 社会を映す鏡としての広告表現

講師：小泉真人（文学部広報メディア学科教授）

日時：2015年4月21日（火）14：00－15：30 受講者数：3名

概要：1950年代初のテレビCMから60～90年代と現代までに制作されたさまざまなCM映像を見ながら各時代像の考察がなされ、良くも悪くもCMは社会の一端を現すものであると解説がなされた。受講者からは、懐かしいCMを観ることができ、その当時を思い出し感慨深かった等の感想が聞かれた。

④ 宇宙から見た地球環境変動の最前線

講師：長 幸平（情報理工学部情報科学科教授）

日時：2015年4月25日（土）10：30－12：00 受講者数：15名

概要：気象衛星ひまわりの画像を見ながら、天気予報の原理と実際の利用法について解説がなされた。また、地球温暖化に関しては、北極海の海氷分布変動やオゾンホールの変動、アララ海の消滅、アマゾンの森林伐採等の経年変化を表す画像をもとに説明がなされた。受講者からは、地球温暖化の実情が非常に深刻であることが実感でき大変勉強になった等の感想が聞かれた。

⑤ シリーズ グローバルカフェへの誘い～東海大学が開く未知の世界～

国・地域	日時	講師	受講者数
第1回 中国	2015年4月25日(土) 13:00-14:30	劉 宇翔 (中国人留学生)	7名
第2回 ナイジェリア	2015年5月9日(土) 13:00-14:30	ナディ・アーサー (ナイジェリア人留学生)	11名
第3回 韓国	2015年5月23日(土) 13:00-14:30	ナム ヒョング/アン スンテ (韓国人留学生2名)	8名
第4回 イタリア	2015年7月15日(土) 13:00-14:30	ボルチェッリ・ヴァットーリア / ロレンツィン・イヴォ (イタリア人留学生2名)	7名
第5回 スペイン	2015年7月18日(土) 13:00-14:30	エレナ・エレラ / ミゲル・アンサ / カルロス・ロベス (スペイン人留学生3名)	11名
第6回 イスラエル	2015年8月8日(土) 13:00-14:30	ナガイ マイ (イスラエル人留学生)	15名
第7回 バングラデシュ	2015年8月22日(土) 13:00-14:30	ホッサイン エムデ イマン (バングラデシュ人留学生)	10名
第8回 台湾	2015年9月19日(土) 13:00-14:30	洪 煥紫 (台湾からの留学生)	13名
第9回 イラン	2015年10月10日(土) 13:30-15:00	マハディバルモギー・ホセイン (イラン人学生)	14名
第10回 ベネズエラ	2015年10月24日(土) 13:30-15:00	ベレス・アルフォンソ / リス ステファニー (ベネズエラ人留学生)	16名
第11回 アフガニスタン	2015年11月 7日(土) 13:30-15:00	サミーム アブドサブル (アフガニスタン人留学生)	18名
第12回 ベトナム	2015年11月21日(土) 13:30-15:00	フィンフォンリン (ベトナム人留学生)	13名
第13回 ブルガリア	2015年12月 5日(土) 13:30-15:00	クリステイナ ヴァルチャノヴァ (ブルガリア人留学生)	20名
第14回 フィンランド	2015年12月19日(土) 13:30-15:00	ヘイッキ イソハニ (フィンランド人留学生)	15名
第15回 ノルウェー	2016年1月9日(土) 13:30-15:00	ルドビー イルヴァ ソリアノ (ノルウェー人留学生)	15名
第16回 中国(景徳鎮)	2016年2月20日(土) 13:30-15:00	周 楽斯 (中国人留学生)	20名
第17回 デンマーク	※開講予定 2015年3月26日(土) 13:30-15:00	ホートムセントア (デンマーク人留学生)	



概要：本学に在籍する留学生（現在 44 カ国・地域）が講師となり、各国の文化や生活習慣についての紹介を通して地域住民との交流を図ることを目的とし、昨年度に引き続き開講した。留学生は、それぞれが誇りに思う自国の自然や歴史、文化、生活習慣について日本語で説明するとともに、自国が抱えるさまざまな問題についても語った。激しい大学入試と厳しい軍隊生活（韓国）、女性も徴兵制度で厳しい軍隊生活を経験する（イスラエル・ノルウェー）、就職難で若者が仕事を求めて国を離れてしまう（イタリア）など、率直に語られた。受講者からは、政治的問題に関する質問も挙がり、留学生が返答に戸惑う場面も見られたが、お互いを理解しようと努力することの大切さを改めて感じさせられた。また、本講座を通して、国情の違いを超えて相違点や類似点を見出し、これまでの認識を改めるきっかけや、僅かな時間のなかで凝縮した国際交流を体験し、国際理解を深める機会を提供できたと考える。

⑥ スマートフォンを活用して楽しむウォーキング

講師：崔 一英（チャレンジセンター教授）

日時：2015年5月8日（金）11:00-12:30 受講者数：4名

概要：講師自身が20年以上続けているウォーキングの効果・効能と、携帯に便利な多機能スマートフォンを活用したウォーキングをより楽しむ方法について解説がなされた。歩数や心拍数等自分の状態を知るためのデータや、コースの標高や周辺情報を得られるアプリケーションの実際の動作解説もなされ、受講者からは有用なヒントを得られた等の感想が聞かれた。

⑦ 大山門前町の歴史的景観と御師住宅

講師：小沢朝江（工学部建築学科教授）

日時：2015年5月19日（火）10:30-12:00 受講者数：15名

概要：大山信仰の歴史と講の結成を促しお世話をする御師とその住宅について解説がなされた。現

在 48 軒が存続しており大山門前町の歴史と魅力を住人・外来者と一体で考え、国の重要文化的景観への選定などの策を講じて動態資産として保護する必要があるとの説明がなされ、その重要性が語られた。大山の歴史的価値を改めて感じる事ができた等の感想が聞かれた。

⑧ いつまでも生き生きと～身体活動量や運動量を増やして健やかな毎日を送ろう！～

講師：吉川政夫（体育学部生涯スポーツ学科教授）

日時：2015年5月21日（木）13：00－14：30 受講者数：15名

概要：伊勢原市と協同で作成された「健康づくり」冊子に基づき、“どのようにして運動を習慣付けるか”について解説がなされた。運動の開始・継続を自己管理する心理学に基づく方法や、ウォーキングの基礎知識と方法、バランスの良い食事、質の高い睡眠等について解説がなされた。健康と運動の関係について改めて考えてみてほしいと受講者へ訴えかけられた。

⑨ 地盤災害を引き起こす要因とその被害事例

講師：杉山太宏（工学部土木工学科教授）

日時：2015年5月22日（金）13：00－14：30 受講者数：8名

概要：土木工学、土質工学が扱う分野についての紹介に続き、地盤災害の種類やその要因についてスライドをもとに解説がなされた。また、3.11震災時の近隣で起こった地盤災害の事例も紹介された。ここ20年ほどで、いかに被害を減らすことができるかという減災の考え方が重要になってきた経緯を伺い知ることができ、受講者との活発な質疑応答も交わされた。

⑩ 家電製品の省エネ性能を理解して環境と家計に優しくなろう！

～ソーラーカー開発の研究者が家電製品の性能を解説する～

講師：木村英樹（工学部電気電子工学科教授）

日時：2015年6月15日（月）15：30－17：00 受講者数：10名

概要：省エネルギーの観点から、冷蔵庫・エアコン・テレビ・照明器具の最新技術が紹介され、併せてカタログの読み方や機種の新旧による電気代の比較等について解説がなされた。特に古い冷蔵庫と電球は、コストとエネルギー効率が悪く環境にも家計にも響くとの説明があり、興味深い内容に受講者は熱心に聞き入り、その聴講姿勢が印象的な講座となった。

⑪ シリーズ 入門！古代エジプト文明 2015

テーマ	日時	受講者数
第1回 王家の谷の歴史と王墓を造った人々	2015年6月17日(金)18:30-20:00	20名
第2回 砂絵で古代エジプト(ワークショップ)	2015年7月1日(水)18:30-20:00	15名
第3回 古代エジプトパピルスの修復体験(ワークショップ)	2015年10月7日(水)18:30-20:00	9名
第4回 古代エジプト文字(象形文字入門)	2015年10月23日(金)13:30-15:00	15名

講師：山花京子（文学部アジア文明学科准教授）

概要：2014年度に好評を得た連続講座「入門！古代エジプト文明」の続編として、今年度は全4回にわたり開講した。第1回は、紀元前1500年代の王たちの墓が集中する「王家の谷」をテーマに、盗掘を逃れるための墓の立地と構造の変化の歴史や、その造営に携わった職人の街「デイル・エル・メディーナ」について解説された。第2回は国際文化財プロジェクト（ICPP）

の学生が中心となり砂絵制作ワークショップを実施した。準備された下絵から受講者は好みの図柄を選び、色の砂を撒いて固定する作業に取り組んだ。第3回もICPPの学生が中心となりパピルス修復体験のワークショップを行った。パピルス文書とその修復についての説明の後、水筆・ガラス棒・錘などの修復道具の使い方を学生たちが解説し、それに倣って受講者は作業を行った。第4回はヒエログリフ(古代エジプトの象形文字)の書き方を学び、名前や簡単な文章を書いてみるワークショップが行われた。古代エジプト言語の歴史と文字の解読方法について説明がなされた後、受講者は葦ペンや竹串にインクを付け、自分の名前などをパピルス(現代のもの)に書いていった。受講者からは「貴重な体験ができて嬉しかった。連続講座で多くの事を学ぶことができ、もっと学びたい気持ちになった」、「若い人たちが修復に携わっている姿を見て感激した」等の感想が寄せられ、特にワークショップを通じて学生と地域住民との交流の深まりが感じられる講座となった。



⑫ テラッコタでオブジェを造ろう～VIVA!土いじり!～

講師：吉村維元(教養学部芸術学科准教授)

日時：2015年7月15日(水) 13:00-16:00 受講者数：6名

概要：昨年度に続き2回目の開講となった。講師からの技法説明を受け、受講者は作品制作に没頭していた。でき上がった作品は乾燥工程を経た後、大学の工房で焼成され、受講者により色づけが行われた。その作業中も創作意欲がかきたてられたのか、講師とのやり取りも活気に満ちたものであった。



⑬ 伝説で巡るスペイン

講師：田辺加恵(外国語教育センター講師)

日時：2015年7月18日(土) 10:30-12:00 受講者数：15名

概要：有名な観光地をスライドで紹介しながら、スペインの歴史とその地にまつわるさまざまな“伝説”が語られた。“伝説”とは、それぞれの土地・時代の人々の考え方を表す集合的記憶で、集団で共有される過去のイメージであると解説された。受講者からは、「ガイドブックには無い話を聞くことができ、今後は違った視点で観光を楽しめそうだ」等の感想が聞かれた。

⑭ 本を作ろう!～とび出すしかけにチャレンジ!～

講師：中央図書館職員

●第1回 日時：2015年8月6日(木) 13:30-15:00

受講者数：13名

●第2回 日時：2015年8月7日(金) 13:30-15:00

受講者数：14名

概要：昨年に続き2回目の開講となった。小学生を対象とし、とび出すしかけの本作りを体験し、



その仕組みを学ぼうと企画。はじめは戸惑っていた児童たちも、丁寧な指導を受けて次第に慣れ、切り抜き・折り・貼り付けなどの作業に真剣に取り組んでいた。とび出す本を完成させた児童たちの表情は達成感に満ち、何度もページをめくる姿が印象的であった。

⑮ キャラクターとまちづくり

講師：池村明生（教養学部芸術学科教授）

日時：2015年9月1日（火）18：00－19：30 受講者数：14名

概要：平塚市の農産物と漁業をアピールする3つのキャラクターについて、学生参画の実践型教育プログラムとして開発した発端から実体化までの経緯について、実例に基づき解説がなされた。キャラクター考案に関わる行政や商店街の担当者も受講し、活発な意見交換がなされ、今後の活動に生かしたいとの感想が聞かれた。

⑯ 図解ワークショップ

講師：富田誠（教養学部芸術学科講師）

日時：2015年9月16日（水）18：00－19：30 受講者数：5名

概要：議論の内容を視覚化するための文章の図解についての説明がなされた後、実際に単語や文章で示された事項を絵や図を用いて説明するワークショップが行われた。段々と複雑化するテーマを図解して説明するという課題に受講者は熱心に取り組んでいた。実際に広告・広報の仕事に携わっている受講者からは、今後の活動に生かしたい等の感想が聞かれた。

⑰ 認知症サポーター養成講座

講師：教養学部学生（キャラバンメイト有資格者10名）

	日時	受講者数
第1回	2015年10月5日(月) 10:30-12:00	18名
第2回	2015年10月10日(土) 13:30-15:00	6名
第3回	2015年10月24日(土) 13:30-15:00	11名
第4回	2015年11月7日(土) 10:30-12:00	10名
第5回	2015年11月16日(月) 13:30-15:00	8名
第6回	2015年11月21日(土) 10:30-12:00	8名
第7回	2016年2月6日(土) 10:30-12:00	10名
第8回	2016年2月10日(水) 10:30-12:00	15名
第9回	2016年2月13日(土) 10:30-12:00	8名

概要：

厚生労働省の推進する「認知症サポーターキャラバン」のキャラバンメイトの資格を有した学生たちが講師となり、標準テキストにそったプログラムを用いて、10月・11月・2月の3ヵ月間で計9回の同一内容の講座を行った。ビデオで認知症患者に対する間違っただ対応と望ましい対応について学んだ後、さらなる対応について講師と受講者がグループワークで意見交換を行った。受講者からは、「身近な問題として大切な事を学んだ」「グループでの話し合いによって視野が広がった」「若い人たちが認知症について考えていることを心強く思った」等の感想が聞かれた。また、より具体的、実践的な方法論の提示が必要ではないかという声も寄せられ、今後の課題となっている。



⑱ 正しく怖がる放射線講座

講師：吉田茂生（工学部原子力工学科教授）

日時：2015年11月5日（木）18：30－20：00 受講者数：16名

概要：五感で感じることのできない放射線をさまざまな測定器を介してその実態を感じてもらおうと企画された。特殊な器具を用いて電子の流れる様子が実演され、また会場の空気を吸引した掃除機の吸引口から出る放射線も測定され、受講者は目で見て、音で感じ取っている様子であった。大気中や人体内の自然放射線についても、その性質や影響を正しく理解できるように解説がなされ、受講者は真剣に聴講していた。

⑲ ソーラーカーレースを終えて

講師：大塚隆司（本学大学院工学研究科修士課程・ソーラーカーチーム学生代表）

日時：2015年11月18日（水）18：00－19：30 受講者数：6名

概要：オーストラリア大陸の南北3000kmを走破する世界最大のソーラーカーレースに参加した学生代表から、車体製作から現地でのテスト走行・予選の様態など、レース参加までの過程や概要について解説がなされた。過酷なレースに挑み「日本のものづくりのすごさ」を世界に示そうと奮闘する学生らの姿に、受講者から若者への認識が改まったと感心の声が寄せられた。

⑳ マイナンバー制度ってなに？

	講師	日時	受講者数
第1回	秦野市役所職員	2015年12月15日(火) 13:30-15:00	24名
第2回	秦野市役所職員	2015年12月18日(金) 13:30-15:00	24名
第3回	平塚市役所職員	2016年1月7日(土) 13:30-15:00	13名



概要：

秦野市の担当課職員を講師に秦野市民を対象として2回、平塚市の担当課職員を講師に平塚市民を対象として1回、計3回シリーズで開講した。内閣府作成のマイナンバー解説のビデオ上映と、配布資料をもとに解説がなされた。マイナンバーの使用場面・メリットなど利用方法の他にも、プライバシ

ーやセキュリティの問題などについても解説がなされ、受講者からの多くの質問にも丁寧な回答がなされた。

⑳ トルコの音楽と歴史

講師：松本奈穂子（教養学部芸術学科准教授）

日時：2015年12月17日（木）13：30－15：00 受講者数：23名

概要：音楽や舞踊を通じた異文化理解、他者理解のための重要な入り口として、トルコ共和国の音楽と歴史について解説がなされた。キリスト教世界とイスラム世界の結節点となる歴史的変遷や、トルコ軍楽隊や民族舞踊などの楽器や衣装、独特のリズムについても紹介された。受講者から、「もっと沢山の音楽を聴いてみたい」と次の講座開講に期待が寄せられた。

㉑ 外国につながる子どもたち

講師：田口香奈恵（国際教育センター講師）

小澤ネト治幸（別科日本語研修課程生）・前場美里（文学部日本文学科2年生）

日時：2016年1月23日（土）14：00－15：30 受講者数：9名

概要：外国にルーツを持つ子どもたちの現状と、その子どもたちへの日本語指導の必要性等の解説がなされた。後半はブラジルからの留学生と、子どもたちへの学習支援活動に携わる学生へのインタビューを中心に意見交換が行われた。学校や家とも異なる子どもたちの居場所を作り、サポートができるようにしたいという学生の志に、受講者からは共感の声が寄せられた。

㉒ 支援における学生の成長～4つの力から～

講師：安久拓也・藤田健輔・滝沢慶幸（本学チャレンジセンター3.11生活復興支援プロジェクト学生）

日時：2016年2月27日（土）13：30－15：00 受講者数：15名

概要：プロジェクトの活動理念と活動の企画・立案・計画・実施から学生たちが体得した4つの力（自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力）について説明がなされた後、「私たちは『復興』のために何ができるのか」をテーマに受講者とのワークショップが行われ、さまざまな意見が出された。離れた場所においても精神的な支援ができるのではないかなど、改めて考えさせられたと受講者の感想が聞かれた。

㉓ ブランドを創り出すチカラ

講師：岩谷昌樹（政治経済学部経営学科教授）

日時：2016年3月14日（月）10：30－12：00 ※開講予定

3.教養教育の改革に向けた取組み

1)FD・SD研修会の開催	64
2)PA型教育の実践	69
3)PA型教育の達成度を評価する方法の考案・試行	71
4)PA型教育を担う新組織の設立	72

3. 教養教育の改革に向けた取組み

1) FD・SD 研修会の開催

教養教育の改革をさらに進め、PA 型教育の構築を目指すために、今年度は主に PA 型教育導入・推進に向けた教職員の理解・能力の向上を目的とした研修会として、次の通り開催した。

①PA 型教育用教職員研修（湘南校舎）

開催日：2015 年 8 月 18 日（火）～19 日（水）

場 所：湘南校舎 18 号館サイエンス・フォーラム

講 師：Dennis Donovan (National Organizer for Public Achievement, Sabo Center for Democracy and Citizenship at Augsburg College.)

Elisabeth Bott (Student Fellow, Sabo Center for Democracy and Citizenship at Augsburg College.)

参加者：36 名（湘南、高輪、清水、伊勢原、熊本、阿蘇校舎教職員等）

概 要：

【1 日目：8 月 18 日（火） Concept and Purpose of Public Achievement Education】

時間	内容
13:00	開会挨拶
13:05	Check-in for Training Program
13:30	Models of democracy and citizenship What is civic agency?
14:15	Coffee Break
14:45	Public Achievement terms Public Achievement Education at Tokai University • Learn and teach Public Achievement Education practices • Introduce Public Achievement process
15:45	Evolution
16:00	Adjourn

1 日目は、梶井副学長から研修の目的等の説明がなされ、授業への活用や評価のポイントなどについて理解を深めてほしいと期待が寄せられた。研修は Dennis Donovan 氏による PA のコア・コンセプトである Citizenship についての解説からスタートした。PA 型教育を行う上で重要となるのは「Civic Agency（市民的エージェンシー）」であり、スターウォーズの登場人物等の身近な事例を用いて Civic Agency の特徴についても詳しく解説された。「学生にとっての最初の大きな課題は何だったか」という Donovan 氏の問いに対して、PA コーチの経験を持ち、今回 Donovan 氏のアシスタントとして



で参加した Elisabeth Bott さんは「自分は何に関心があるのか、なぜ情熱を感じるのかを知ることが最初の大切なステップでした」と答えた。また、ミネソタへの留学時に PA の授業を受講した経験のある他大学学生（Donovan 氏の呼びかけで参加）は「自分自身が主役となりクラスの中で意見を発表することが課題でした」と述べた。このように学生たちが感じる課題を解決していくことで、Civic Agency の醸成につながると Donovan 氏は解説された。

参加者に対しては「日本社会における現在の課題は？」という質問が投げかけられ、次々に挙がった回答を、日本の考え方の一部として興味を持たれた一方で、「米国でも課題は類似し

ている。自ら行動を起こす人材を養成していかななくてはならない。また、今回挙げられたような課題や問題について、日ごろから学生と話し合う機会を設けていくべきだ」と述べた。

さらに、PAを実践するにあたり必要と考えられるプロセスについて、PAでは社会に関わる全ての人を社会人と呼ぶこと、学生に社会の問題が自分たちの問題であることを理解させること、課題解決に向けたアクションプランを作り、実行し、成果を発表・共有した後は必ずお祝いすること（celebration）などの解説がなされ、参加者と活発な意見が交わされた。

【2日目：8月19日（水） Public Achievement Practices】

時間	内容
9:30	開場
10:00	Public narrative and one to one relational meetings
11:15	Doing the Public Achievement process in 45 minutes <ul style="list-style-type: none"> ・ Role of coach (facilitate team, project manager, experiential educator) ・ Issue development, power mapping, action
12:00	Lunch
13:00	Free space and civic deliberation
14:30	Coffee Break
15:00	Civic agency indicators, evaluation, and questions
16:00	Adjourn

2日目は「Learning about how to create free space in the classroom」「Learning about how to evaluate student's outcomes in PA classes and projects」と題し、若者の社会参加に関する自己関心（self-interest）の引き出し方や1対1の関係性を作り他者への理解を深めるために有効なOne-to-oneインタビュー、地域が抱える特定の課題について関係者を書き出しながらその解決策を探るPower mappingなどのPAを実践するための手法について解説がなされた。また、実際に参加者同士でOne-to-oneインタビューや4名～8名のグループを作って話し合い、発表するFree spaceなど



PAのプロセスを体験するワークショップも行われた。

参加者からは、「講義だけではなく、ワークを含む研修であったので、理解度が高まったと思う。PA教育に関するコーチ用のハンドブックを読むだけではわからない細かいことを学ぶことができて良かったと思います」、「これまでのFDで海外研修の報告という形で伺っていたPAについて、直接レクチャーを受けることができてとても有意義でした。とても理解が深まったと思っています」、「学部初年次教育、専門ゼミのあり方を考える機会となりました。自分の行っている教育が確認できました。このような教職員の学ぶ機会が増え、学内で普遍性を持つことを望みます」などのコメントが寄せられた。

②PA型教育用教職員研修（札幌校舎）

開催日：2015年8月21日（金）

場 所：札幌校舎 マルチメディアホール（第1部）／N212教室（第2部）

講 師：Dennis Donovan（前述と同じ）

Elisabeth Bott（前述と同じ）

参加者：約 50 名（札幌校舎教職員、学生）

概要：

開始時間	内容
第1部 パブリック・アチーブメント型教育に関するレクチャー	
10:00	開会挨拶
10:10	Lecture by Prof. Dennis Donovan
11:10	Break
11:20	Demonstrating PA-related activities - one-to-one interview, public narrative, etc.
第2部 パブリック・アチーブメント型教育の実践	
12:00	Lunch
13:00	Workshop: Practicing PA-related activities - one-to-one interview, public narrative, group discussion, etc
15:00	Short presentation by the group leader students
15:30	Comments from Prof. Donovan and Ms. Bott
16:00	終了

第1部では Donovan 氏による PA 型教育に関する基調講演及び PA 型教育手法の実演が行われ、第2部では第1部で学んだPA型教育手法の実践として、「取り組むべき社会問題について」をテーマに、参加した教職員・学生によるグループディスカッションを行い、グループリーダーを務めた各グループの学生がその内容を発表した。

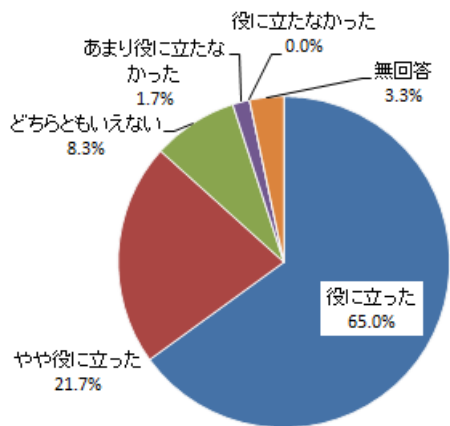
参加者からは、「今後のPA型教育の導入のみならず、自分が現在行っている地域連携活動の1つの指針ともなるものだった」、「さまざまな科目の少なくとも一部には取り入れることはよいと思う。例えば、学科の15回の授業の中で2-3回話し合いの場をもち議論を深めることは、学習効果を高めら



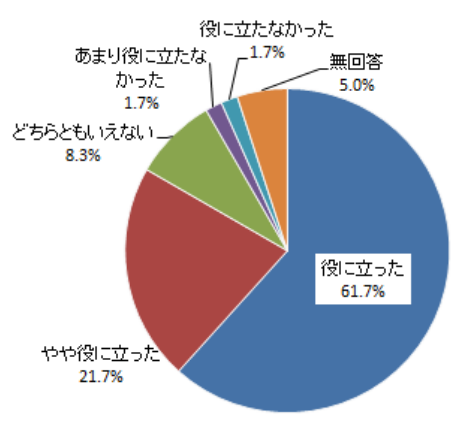
れると思う」、「One-to-oneの方法は、学生がどのようなことを考えているかを理解する上でよいと感じた。普段の授業では一方的に話してしまうので、学生に授業時間の8割は話をさせられるようになりたい」などのコメントが寄せられた。

湘南・札幌校舎の参加者を対象に行ったアンケート結果からも、これらの研修はPA型教育への理解を一層深めたと考える。

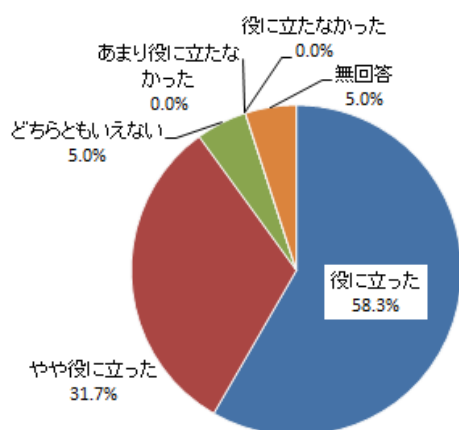
Q1. 本研修は、PA型教育を理解する上で役に立ちましたか？



Q2. 本研修は、シティズンシップを理解する上で役に立ちましたか？



Q3. 本研修は、PA 型教育特有のコミュニケーション手法を
理解する上で役に立ちましたか？



③合同 FD 研修会

【2015 年 6 月 10 日（水）】

主 催：総合教育センター／チャレンジセンター／To-Collabo 推進室

講 師：大江一平（総合教育センター准教授）、堀本麻由子（チャレンジセンター准教授）

参加者：24 名

概 要：本研修会は、PA 型教育について改めて理解する機会として開催され、大江准教授より PA 型教育のコア・コンセプトや PA 型教育でよく用いられるフリー・スペースに関する説明がなされた。その後、堀本准教授より、PA 型教育を行うにあたり、教職員に求められる役割（コーチング）について説明がなされた。その後、フリー・スペースの課題設定方法や授業での導入方法について質疑応答が活発になされ、2 センター間で PA 型教育に対する共通理解が図られた。



【2015 年 9 月 18 日（金）】

主 催：生物学部

講 師：酒井陽年（株式会社リアセック キャリア教育推進グループ）

概 要：札幌校舎にて、生物学部教員を対象に、今年度の PROG 結果や昨年度からの経年変化、結果をどのように教育に活かすことができるかについて、講演をしていただいた。

【2016 年 1 月 20 日（水）】

主 催：キャリア就職センター／チャレンジセンター／To-Collabo 推進室

講 師：酒井陽年（株式会社リアセック キャリア教育推進グループ）

参加者：23 名

概 要：湘南校舎で今年度 PROG 受験を実施した関連部署として、キャリア就職センターとチャレンジセンターの合同 FD 研修会を開催し、今年度の PROG 結果や昨年度からの経年変化、学生行動調査との因果関係等について、結果をど



のように教育や学生指導に活かすことができるか、講演をしていただいた。その後、経年変化で結果が下がった学生への対応やその要因に関する問い、学生行動調査との因果関係等について質疑応答が活発になされた。

④ファシリテーター育成研修会

開催日：2016年2月18日（木）～19日（金）／2016年3月3日（木）～4日（金）

主催：To-Collabo 推進室

講師：野村恭彦、芝池玲奈（株式会社フューチャーセッションズ）

参加者：教職員 35名

概要：今年度から新たに実施しているフリー・スペース等、多様なステークホルダーを招き入れ、対話の場をファシリテーションし、教職員を核とした“解決策を導くことのできる人材”を学内に育成していくことを目的として2日間のプログラムを実施した。

【1日目】

時間	内容
10:00	チェックイン
10:30	フューチャーセッション概論
11:30	昼食
12:30	フューチャーセッション体験 ・8つの対話の方法論 〔サークル、ストーリーテリング、ワールドカフェ、フィッシュボウル、マグネットテーブル、ブレインストーミング、ドット投票、クイックプロトタイプング〕
15:00	ファシリテーション実践準備（問いづくり+対話設計）
16:30	チェックアウト

1日目は、講師により、プログラムのねらいやフューチャーセッションの概念について解説がなされた後、8つの対話方法論を用いたセッションの基本パターンを体験した。その後、2日目の実践に向けて、それぞれが関心を抱くテーマについて「問い」を設定し、22分間のセッションを設計した。

セッションの基本パターンの体験では実際にテーマが設けられたことにより、参加者同士の活発な対話生まれ、その中でさまざまなアイデアが飛び出した。対話を通じてフューチャーセッションの理解が深まっただけでなく、本研修会自体が新しい発想を生む場となった。最後に参加者全員から2日目への期待が語られ、1日目を終えた。



【2日目】

時間	内容
10:00	チェックイン
10:30	ファシリテーション実践 【30分×8コマ×2グループ】 進め方：・オープニングトーク ・メインアクティビティ ・クロージングトーク ・講師・参加者からのフィードバック
12:00	昼食
13:00	ファシリテーション実践（続き）
15:30	振り返り・ネクストステップ設計
16:30	チェックアウト

2日目は、2グループに分かれ、1日目に各自が設計した22分のセッションを全員がファシリテーターとして実践・体験することで、場の運営方法とファシリテーターのあり方について理解を深めた。また、ファシリテーターへのフィードバックとして、残りの参加者は良かった点・改善点等を付箋に書き出し、グループ全体で実践を振り返った。

参加者からは、「普段ではなかなか聞けない話や、皆さんの熱い想いが感じられて良かった。今後、うまくこの技術を生かして対話・セッションしていきたい」、「具体的な手法だけでなく、雰囲気作りまで細かな配慮が大切だと気づいた」などのコメントが寄せられた。



2) PA 型教育の実践

「地域の課題を考えよう！フリー・スペース」の創設

今年度、地域の課題を本学学生、教職員、地域・行政の人が共に考える自由な話し合いの場として「フリー・スペース」を湘南校舎で創設した。学生がより地域を理解するとともに、地域との連携に関心をもつこと、また最終的には地域との連携活動やPA型教育の活動の場につなげることを目的としている。2015年7月にキックオフとして第1回目を開催し、今年度は計3回開催した。

【第1回】

テーマ：「地域防災」

開催日：2015年7月16日（木）

場 所：サテライトオフィス地域交流センター

参加者：24名（教職員・学生・地域住民・行政関係者）

ファシリテーター：堀本麻由子（チャレンジセンター准教授）

概 要：まず、ワールドカフェ方式を用いた話し合いの進め方を学び、「地域防災に強い街はどんな街？」という問いに対して、5～6名のグループに分かれ、各グループのリーダーが中心となり、模造紙や付箋に書き出ししながら意見を出し合った。

次に、リーダーを席に残す形でメンバーが別グループのテーブルへ移動し、それぞれのグループで出た意見を紹介し合いながら、アイデア同士の新しいつながりを探していった。そしてもとのグループに戻って他のグループから得た意見を共有し、意見をまとめ上げ、最後に各グループの代表者が模造紙を見せながら発表を行った。



【第2回】

テーマ：「地域と大学の連携について」

開催日：2015年10月19日（月）

場 所：湘南校舎 17号館

参加者：50名（教職員・学生・地域住民・行政関係者）

ファシリテーター：田島祥（チャレンジセンター講師）

概 要：5～6名のグループに分かれ、メンバーの組み合わせを変えながら小グループで話し合いを続け、大学と地域とが交流を深めるための方策について意見交換が行われた。話し合いの中で出たアイデアを各グループで模造紙や付箋に書き出していった。「コミュニケーションを深めるためには、日ごろの挨拶が大事」「大学生が自治会に参加できる仕組みづくりを考える」など、グループとしての考えをまとめ、最後に全員の前での発表を行った。



【第3回】

テーマ：「地域の情報共有について」

開催日：2015年12月22日（火）

場 所：湘南校舎 17号館

参加者：40名（教職員・学生・地域住民・行政関係者）

ファシリテーター：富田誠（教養学部芸術学科講師）

概 要：3回目はこれまで2回の対話の方法や議論の手法を変え、2025年の未来を想定し、地域の人と人につながるための「知るしくみ」を考えたい。

人と人につながるための情報共有にはどのような秘訣があるのかについて、参加者数人に体験談を述べてもらった後、日ごろから情報共有において気をつけていることなど、参加者全員がそれぞれの体験を紙に書き出していった。その後、2025年の未来予想や変化の兆しを全員で共有し、個々人が2025年に地域の人と人につながるために作ってみたい「知るしくみ」を考え1枚の紙にまとめた。参加者は自分で書いた紙を掲げ、似たアイデアを持つ人や繋がりたいと思うアイデアを掲げる人同士で5～6人のグループを形成。グループごとに話し合い、ひとつのアイデアにまとめ、それを4コマ漫画にして最後に発表を行った。

グループで語られたアイデアの視覚化や4コマ漫画の制作には、各テーブルに配置された教養学部芸術学科デザイン学課程の学生5名が担当した。



3) PA 型教育の達成度を評価する方法の考案・試行

株式会社河合塾と株式会社リアセックが共同開発した「PROG」（専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（＝ジェネリックスキル）を育成するためのプログラム）という調査手法を用いて、今年度も継続して学生の汎用的基礎力を測定し、今後の教育プログラムの検討に役立てるとともに、PA 型教育実施の有効性を測定する基礎資料としてデータを蓄積した。

なお、昨年度は「リテラシー（知識を基に問題解決にあたる力）」と「コンピテンシー（経験から身についた行動特性）」の 2 側面で評価の試行を行ったが、To-Collabo プログラムの地域社会を通じた経験や PA 型教育で身についた能力としての成果評価を考慮し、多くの学生の「コンピテンシー」測定を定期的に行うことが必要だと判断し、今年度は「コンピテンシー」測定のみを行った。

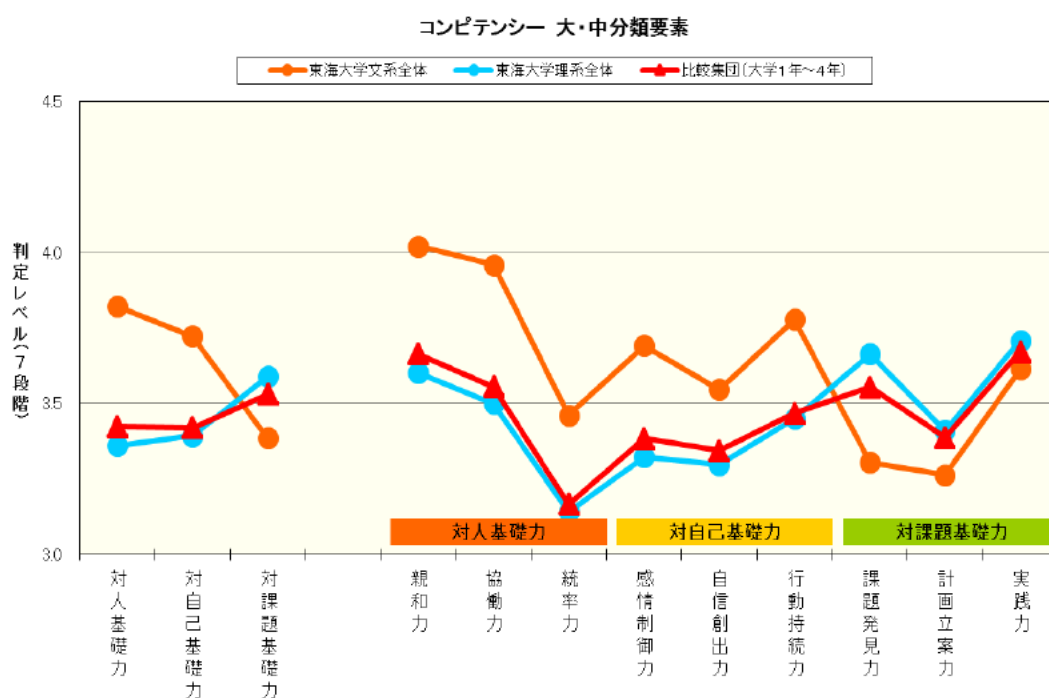
また、その学生の「コンピテンシー」を形成した、あるいは高めた（低めた）要因を調査するため、学生行動調査も合わせて実施した。

今年度は、湘南校舎、清水校舎、熊本校舎、阿蘇校舎、札幌校舎の一部学生、計 2669 名が受験した。

[集計結果]

受験者：文系 1,269 名 理系 1,389 名

- ・文系学部は、対人基礎力・対自己基礎力が、全ての項目において、理系学部、比較集団（他大学 1 年～4 年）より、上回っている。ただ、対課題基礎力は下回っており、中分類で見ると、特に課題発見力の開きが目立つ。一方、理系学部は、対人基礎力・対自己基礎力が、比較集団と比べて下回っており、特に、対人基礎力の開きが大きい。



こうした PROG 受験の結果については、過去 2 年度分と併せて、今後の教育プログラムの検討に活かすこととしている。また、「コンピテンシー」測定結果と学生行動調査結果の相関分析まで行うことで、今後の教育プログラムを検討するに当たり、より具体的なプログラム計画・改善を行うことが可能になると考える。

4) PA 型教育を担う新組織の設立

PA 型教育を担う新組織として、2016 年度より現在の総合教育センターとチャレンジセンターを統合した現代教養センターが設置されることとなり、2015 年度は統合に向けて、合同 FD 研究会や運営体制の検討を行った。また、東海大学教育審議会の下部組織として、現在それぞれのセンターで担当している科目を検討する基礎教養科目検討委員会と PA 型教育の中核となる必修 3 科目（シティズンシップ、ボランティア、地域理解）等を検討する発展教養科目検討委員会を設置し、今後の PA 型教育の運用について検討を行った。

東海大学の新たな地域連携 To-Collabo プログラム 2015
成果報告書
2016年3月
発行 東海大学 To-Collabo 推進室

公式WEBサイト <https://coc.u-tokai.ac.jp>

Facebook <https://www.facebook.com/tokai.coc>



東海大学の新たな地域連携トコラボ

To-Collaboプログラム

成果報告書 2015

東海大学To-Collabo推進室

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

TEL:0463-50-2406

FAX:0463-50-2034

URL:<http://coc.u-tokai.ac.jp>